

鳥取市文化財報告書 22

面影山古墳群・吉岡遺跡
発掘調査概要報告書

1987

鳥取市教育委員会

鳥取市文化財報告書 22

『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』正誤表

頁	行	誤	正
21	22	ことは付言して	ことを付言して
47	16	中心にいとまれた	中心にいとなまれた
図版9 中扉		乱丁	図版9の前頁に吉岡遺跡・ 図版の中扉がはいる。

★お手数ですが訂正をお願いします。

面影山古墳群・吉岡遺跡
発掘調査概要報告書

1987

鳥取市教育委員会



序

この発掘調査概要報告書は、昭和61年度の国庫補助事業として実施した面影山古墳群及び吉岡遺跡の調査記録です。

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が知られており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査の必要となり、消えていく遺跡も増えているのが現状です。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を如実に語る歴史資料であり、後世に語り継ぎ残していくべき貴重な財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また、地元の方々の深い理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

さて、本年度に実施しました発掘調査も無事所期の目的を果して、ここに報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければと念じております。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた土地所有者ならびに地元の方々、関係各機関に心から感謝申し上げます次第です。

昭和62年 3 月

鳥取市教育委員会

教育長 田村 一三

例 言

1. 本書は、昭和61年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 調査を実施した遺跡は、鳥取市正蓮寺地内に所在する面影山古墳群及び鳥取市吉岡温泉町に所在する吉岡遺跡である。
3. 調査の期間は、昭和61年4月18日から昭和62年3月20日である。
4. 本書に用いた方位は、遺跡分布図を除き磁北を示し、レベルは海拔標高である。
5. 本書の執筆・編集は、調査参加者をはじめ多方面の方々の指導と支援を受けて船井武彦、平川誠が担当した。
6. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体 鳥取市教育委員会 教育長 田村 一三

調査指導 鳥取県教育委員会 文化課
鳥取県立埋蔵文化財センター

事務局 鳥取市教育委員会 社会教育課

調査担当者 小杉宗雄、平川 誠、船井武彦

本文目次

序文
例言

面影山古墳群

I 発掘調査経過	1
II 位置と歴史的環境	1
III 発掘調査の概要	3
1 発掘調査の方針と経過	3
2 面影山74号墳	6
3 面影山75号墳	11
4 面影山76号墳	13
5 面影山77号墳	16
6 面影山78号墳	19
IV まとめにかえて	20

吉岡遺跡

I 発掘調査に至る経過	23
II 遺跡の位置と歴史的環境	24
III 調査の概要	28
1 遺跡の立地	28
2 トレンチ調査の経過と内容	32
3 字大海出土の瓦類	41
IV まとめ	45

図版目次

面影山古墳群

図版 1	1. 調査地遠景 (南から)	2. 調査地近景 (南東から)
	3. 調査地より空山遠望 (右手大路山)	4. 調査地近景 (南から)
図版 2	1. トレンチ掘り下げ後全景 (西から)	2. 調査完了後全景 (西南西から)
	3. 面影山74号墳全景 (南東から)	4. 面影山75号墳第1主体
図版 3	1. 面影山74号墳第1主体遺物出土状態 (東から)	
	2. 面影山74号第1主体遺物出土状態近景	
	3. 面影山75号墳全景 (南から)	4. 面影山75号墳主体部 (西から)
図版 4	1. 面影山76号墳全景 (東から)	2. 面影山76号墳周溝内土器出土状態近景
	3. 面影山76号墳主体部 (北東から)	4. 面影山76号墳主体部遺物出土状態近景
図版 5	1. 面影山77号墳全景 (西から)	2. 面影山77号墳第1・2主体部 (北から、手前第1主体)
	3. 面影山77号墳第3主体	4. 面影山78号墳全景 (西から)
図版 6	面影山74号墳出土遺物	
図版 7	面影山75・76号墳出土遺物	
図版 8	面影山77・78号墳出土遺物	

吉岡遺跡

- 図版 9 1. 調査地北東の向山から 2. 調査地北東端の南東側丘陵から
3. 調査地南西端から 4. 調査地中央から北東方向を望む
- 図版10 1. 瓦出土地点遠景（南東から、左手新町集落） 2. 瓦出土地点近景（北から）
3. 瓦出土地点付近出土の礎石（？） 4. 瓦出土地点近景（東から）
- 図版11 1. 第2トレンチ（南から） 2. 第3トレンチ（南西から）
3. 第4トレンチ（西から） 4. 第5トレンチ（南から）
- 図版12 1. 第6トレンチ（南東から） 2. 第6トレンチ柱穴（西から）
3. 第6トレンチ柱穴（南から） 4. 第7トレンチ（北西から）
- 図版13 1. 第8トレンチ（西から） 2. 第9トレンチ（北から）
3. 第10トレンチ（西から） 4. 第11トレンチ（南から）
- 図版14 1. 第12トレンチ（西から） 2. 第13トレンチ（西から）
3. 第14トレンチ（北西から） 4. 第15トレンチ（西から）
- 図版15 トレンチ出土土器（T 3・4・5・6・7・9）
- 図版16 トレンチ出土土器（T 10・11・14）
- 図版17 トレンチ出土遺物（T 4・6・9・10・11）字大海出土瓦
- 図版18 字大海出土瓦・須恵器

挿 図 目 次

面影山古墳群

第1図	鳥取市南東部遺跡分布図	2
第2図	面影山古墳群分布図	4
第3図	面影山古墳群調査地地形実測図	5
第4図	面影山古墳群調査地遺構配置図	6
第5図	面影山74号墳墳丘遺存図	7
第6図	面影山74号墳第1・4主体実測図	8
第7図	面影山74号墳第1主体西端遺物出土状態 実測図	8
第8図	面影山74号墳第2・3主体実測図	9
第9図	面影山74号墳第1主体出土鏡（復元）、 玉類実測図	10
第10図	面影山74号墳墳丘出土土師器実測図	11
第11図	面影山75号墳主体部出土小玉実測図	11
第12図	面影山75号墳墳丘遺存図	12
第13図	面影山75号墳主体部実測図	12
第14図	面影山76号墳墳丘遺存図	13
第15図	面影山76号墳主体部実測図	13
第16図	面影山76号墳出土土師器実測図	14
第17図	面影山76号墳出土鉄器実測図	15
第18図	面影山77号墳墳丘遺存図	16
第19図	面影山77号墳第1主体実測図	17
第20図	面影山77号墳第2主体実測図	17
第21図	面影山77号墳第3主体実測図	18
第22図	面影山77号墳第1主体出土土師器 実測図	18
第23図	面影山78号墳第1主体土刀子実測図	18
第24図	面影山78号墳墳丘遺存図	19
第25図	面影山78号墳周溝内出土土師器実測図	20

吉岡遺跡

第26図	吉岡遺跡表探土器実測図	23
第27図	吉岡遺跡周辺主要遺跡分布地図	26
第28図	尾山遺跡表探土器実測図	28
第29図	吉岡遺跡小字分布図	29
第30図	鳥取市吉岡温泉町周辺遺跡分布地図	30
第31図	吉岡遺跡全体図（トレンチ配置図） 折り込み	
第32図	トレンチ断面実測図（T 3・9）	35
第33図	トレンチ断面実測図 （T 2・4・5・6・7・8）	36
第34図	トレンチ断面実測図 （T 10・11・12・13・14・15）	37
第35図	トレンチ出土土師器実測図 （T 3・4・5・6・7）	38
第36図	トレンチ出土土師器実測図（T 9・10・11）	39
第37図	トレンチ出土土師器実測図（T・11・14）	40
第38図	トレンチ出土遺物実測図（T 4・6）	41
第39図	トレンチ出土瓦類拓影・実測図（T 9）	41
第40図	字大海出土瓦拓影・実測図（1）	42
第41図	字大海出土瓦拓影・実測図（2）	43
第42図	字大海出土土師器実測図	44
第43図	T 9出土鳥尾片部位模式図	48

表 目 次

面影山古墳群

第1表	面影山古墳群調査結果一覧表	22
吉岡遺跡		
第2表	吉岡地区遺跡分布一覧表	31
第3表	調査トレンチ一覧表	46

面影山古墳群



I 発掘調査経過

昭和60年12月、鳥取市正蓮寺の下田、福永両氏から所有している山林を造成し、畑地として利用したいが古墳の存否について教えてほしいといった内容の相談が鳥取市教育委員会にあった。現地は、鳥取駅南方2kmの面影山丘陵の南面にあたり、地番は鳥取市正蓮寺字小丸山245-4、同245-8、同245-20である。当該地は、本市教育委員会のこれまでの踏査で丘陵斜面部に円墳4基が所在するとされていた地域であり、さっそく現地の確認を行なった。ところが、すでに立木の抜根等造成の一部工事が実施されており、旧地形を詳細に観察することができなかった。しかし、この現地確認によって埴輪片等の遺物を採集することができ、当該地に古墳等の埋蔵文化財が存在することは明らかとなった。また、稜線上にも古墳と考えられる段状の地形が認められた。

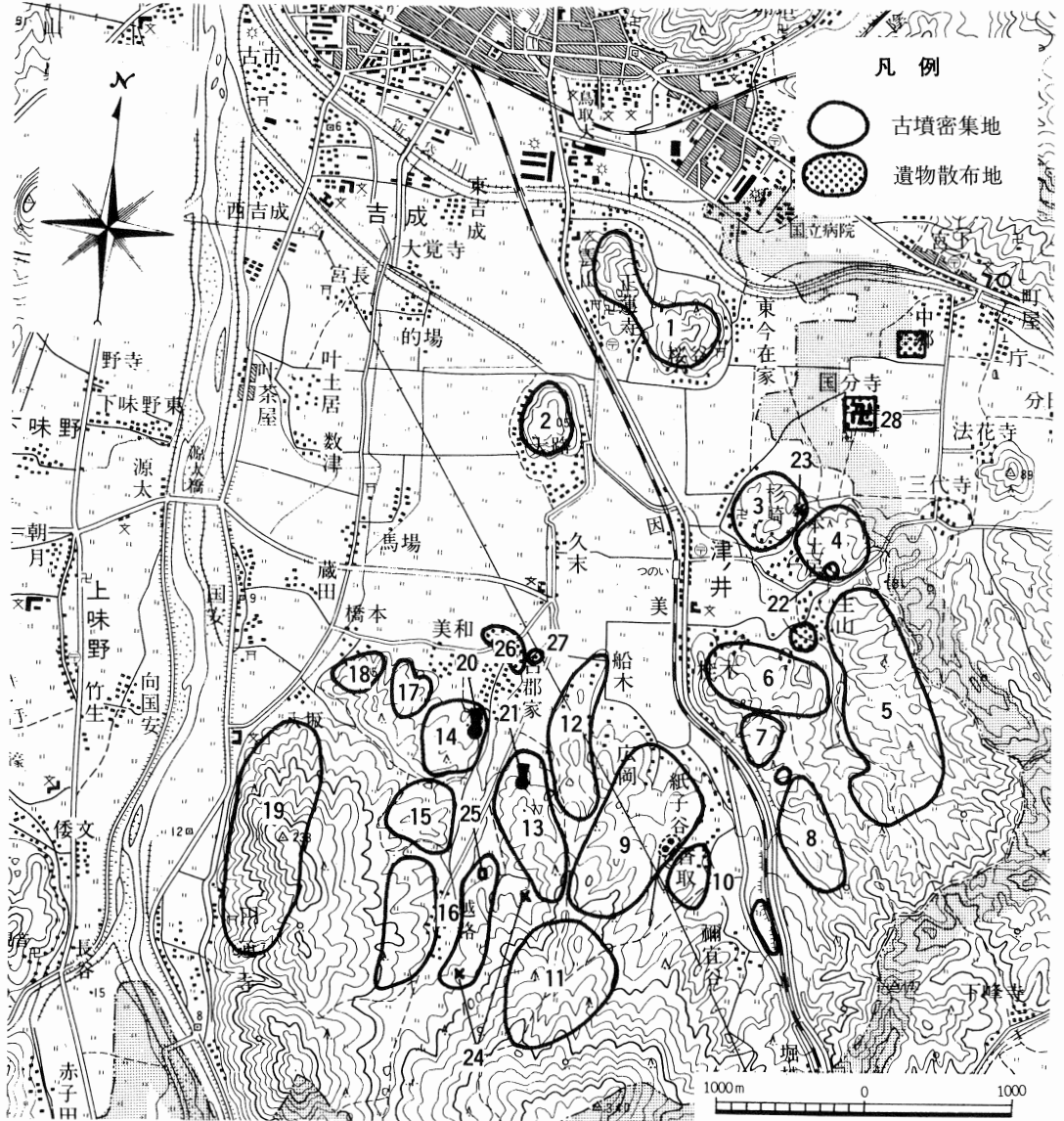
このため、鳥取市教育委員会では本農地造成区域内の埋蔵文化財の保護方法等について土地所有者と協議を進めることとなった。しかし、現況での保存が難しいことなどもあり、造成工事によって消滅する恐れのある埋蔵文化財について発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、国及び県の補助金を受けて昭和61年4月18日から昭和62年3月20日まで実施した。

発掘調査にあたっては、土地所有者である下田直弘、福永義久両氏及び面影郷土史研究会の格別のご協力をいただいた。

II 位置と歴史的環境

面影山古墳群は、鳥取市の南東部の平野に位置する通称面影山と呼ばれている独立丘陵上に立地している。本丘陵は鳥取駅の南東約2kmの位置に所在するが、この地域は、かつての法美郡面影村にあたり、のち明治29年より岩美郡に所属、昭和28年に鳥取市の一部となっている。本古墳群が立地する独立丘陵は、北西～南東方向に主稜線を延ばし、長さ1.3km、幅は南東部で最大0.6kmである。標高は南東側で最大110.3m、中央部から北西側は標高50m前後と低く、平野部からの比高差は100～40m程である。丘陵麓部に沿って、雲山、正蓮寺、桜谷、東今在家、大杓などの集落が営まれているが、近年の宅地造成によって、各集落周辺は市域でも有数の住宅団地が展開している。特に丘陵北東側の緩傾斜地は中腹近くまで宅地化し、新たな造成工事の進展によって尾根の形状は大きく変貌している。現在までに本丘陵上には、全長54mの前方後円墳である面影山73号墳をはじめ94基の大小様々の古墳が確認されているが、このような状況の中で、すでに8基の古墳の消滅が報告されている。

面影山丘陵周辺の平野は、沖積平野に特徴的な粘土質の堆積物によって形成され、水もちがよく、初期水稻耕作に適していると考えられ、古くからこの地域の生産基盤の確保のための条件を備えていたといえる。近辺の遺跡について眺めてみると、丘陵尾根及び麓部とその縁辺の平地部には、現在までに先土器時代から縄文・弥生時代にさかのぼる遺跡は知られていない。本丘陵にもっとも近



- | | | | |
|----------|--------|-----------|-------------|
| 1 面影山古墳群 | 8 紙子谷 | 15 園原 | 22 津ノ井宇柵遺跡 |
| 2 大路山 | 9 広岡 | 16 越路 | 23 余戸窠跡 |
| 3 杉崎 | 10 香取 | 17 美和 | 24 越路古窯址群 |
| 4 津ノ井 | 11 空山 | 18 橋本 | 25 越路銅鐸出土地 |
| 5 生山 | 12 船木 | 19 八坂 | 26 久末・古郡家遺跡 |
| 6 桂見 | 13 六部山 | 20 古郡家1号墳 | 27 大路川遺跡 |
| 7 海蔵寺 | 14 古郡家 | 21 六部山3号墳 | 28 因幡国分寺跡 |

第1図 鳥取市南東部遺跡分布図

い縄文時代の遺跡としては、古郡家地内に晩期前半に属する大路川遺跡が唯一確認されているのみで、その解明はほとんど進んでいない。弥生時代の遺跡についても、本地域の実態は明らかでなく、住居跡等の明確な遺構を伴うものとしては、わずかに久末・古郡家遺跡（弥生時代中期後葉）が存在するのみである。しかし、現在鳥取新都市開発整備事業に伴う生山地区の調査では、標高50～80mの丘陵上から弥生時代後期後半の竪穴住居跡がいくつか検出されており、今後の調査事例の積み重ねが期待される場所である。そのほか、越路の樹園地から横帯二区流水文、外縁鈕2式の銅鐸が出土している。

鳥取平野南東部の丘陵地帯は、古墳の密集地域として知られているが、面影山古墳群と同様に独立丘陵上に営まれた大路山古墳群をはじめ、その南側に延び出す丘陵上には美和、古郡家、六部山、広岡、空山、紙子谷、生山、津ノ井などの古墳群が展開している。大半以上が小規模な円墳であるが、因幡最大級の前方後円墳である古郡家1号墳（90m）、前方後円墳としては因幡最古とされる六部山3号墳（63m）などは、古墳時代前・中期に首長墓として継続的に造営されたものと考えられている。このほか前・中期に属する古墳としては近年調査された竪穴式石室をもつ生山29号墳があり、筒形銅器など豊富な遺物が出土していて注目されている。また、この地域は空山古墳群など横穴式石室を主体とするいわゆる「後期群集墳」が展開し、その中には線刻壁画を伴うものもあって一つの特徴となっている。また、近年調査された広岡48号墳からは、金銅装主頭大刀が検出されている。他に古墳時代に関連するものとして、津ノ井宇祢遺跡、越路の須恵器古窯址群があげられる。

面影山丘陵の東側の平野部には因幡国府跡、因幡国分寺跡があり、これらの遺跡の所在からも面影山周辺の平野部は、早くから中央との結びつきを深め発展し消長していった地域であるといえる。

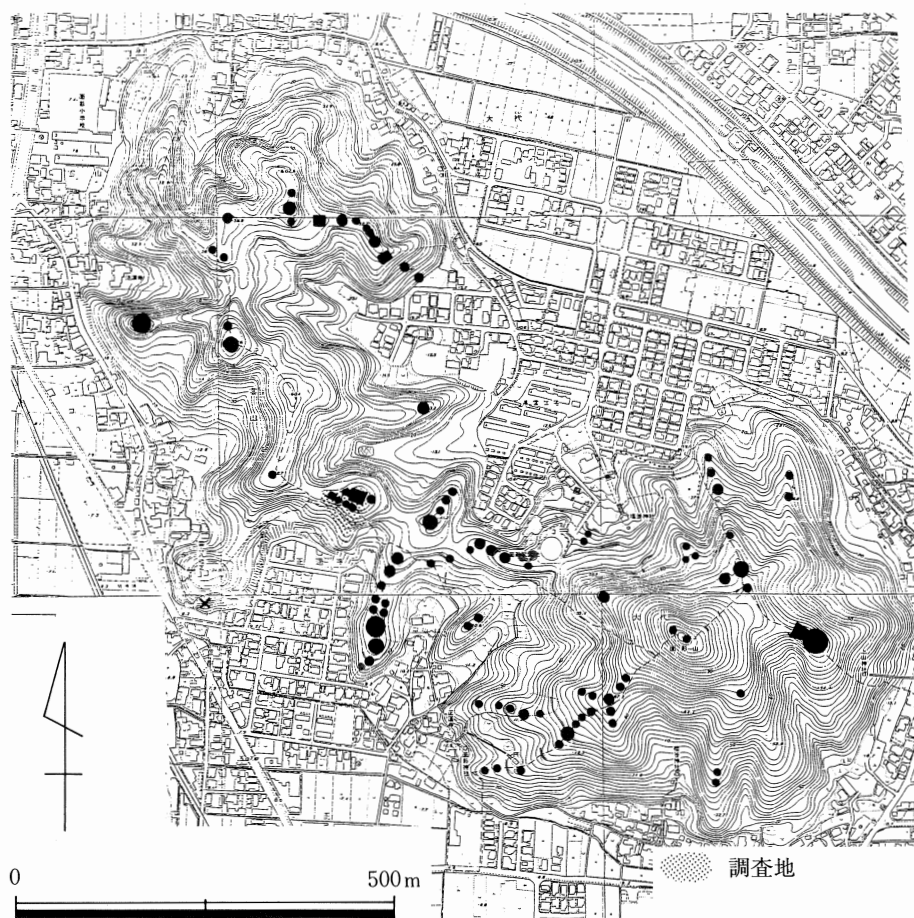
Ⅲ 調査の概要

1. 発掘調査の方針と経過

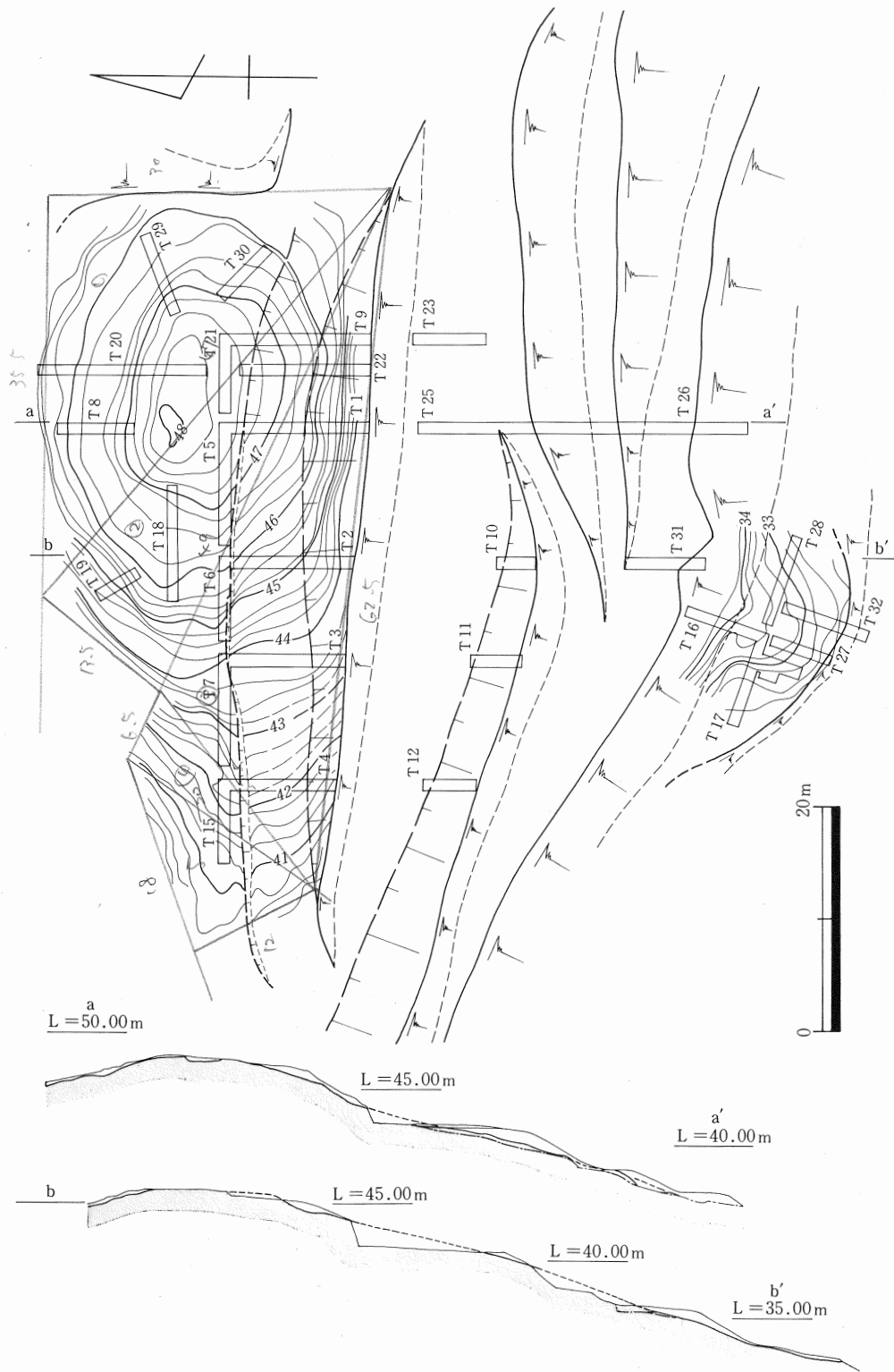
面影山丘陵に所在する古墳の分布については、第2図に示すとおりである。本図は、『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』（1973）にもとづいてこれまでに現地調査を行ない確認照合したものである。その中で今回調査した5基の古墳は、上記地図には記載されていない古墳である。今回の調査にあたって、便宜上その名称を上記『地図』中の本古墳群末尾名称に続けて面影山74・75・76・77・78号墳とした。

さて、本調査地は、重機により尾根稜線から南半面を段状に掘削造成されて原地形をそこねていた。このため調査前の観察では、墳丘等の存在を明瞭に認めることは不可能であった。しかし、全体的にみれば、造成による盛り土の下には、掘削をまぬがれている部分も少なくないと考えられた。以上のような調査地の現状及び遺物採集地点、地形等を考慮して、まず造成盛り土下の原地形の遺存部を確認し、更には古墳等の遺構検出の手がかりとするため、第3図のとおり合計29本のトレン

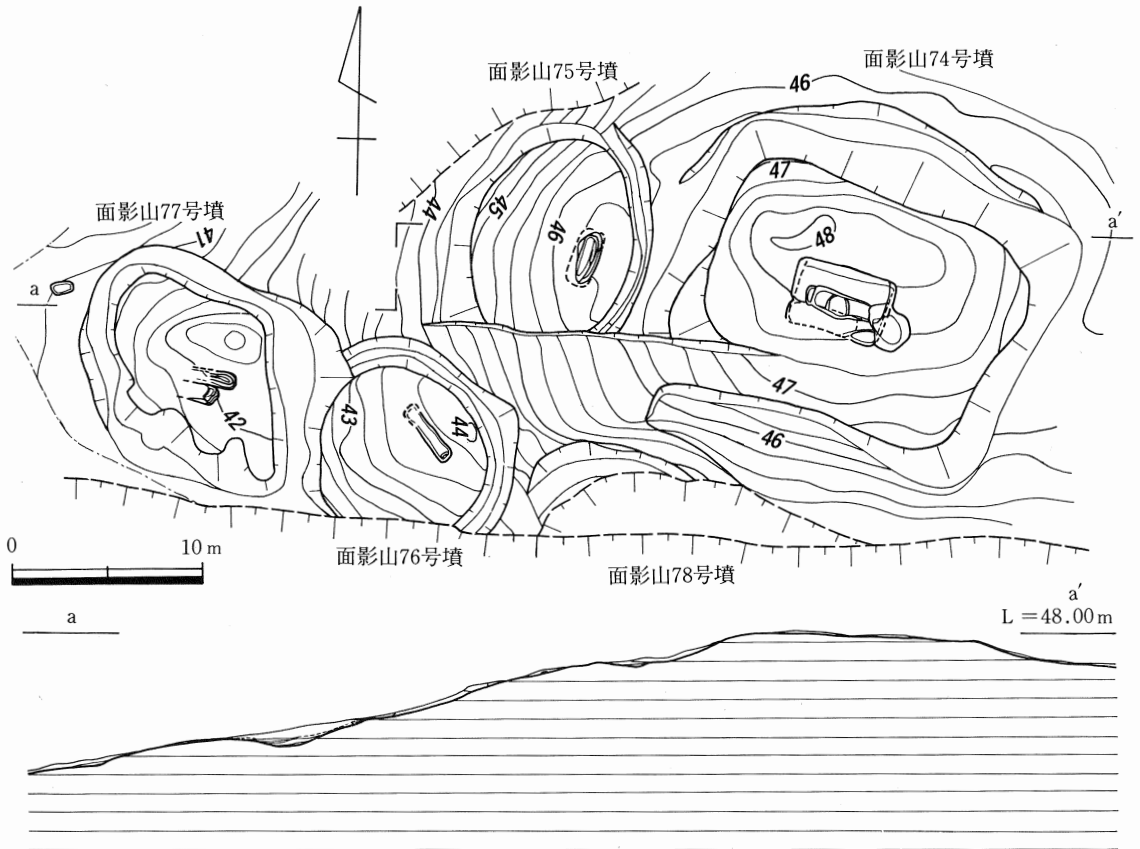
チを設定した。トレンチ掘り下げの結果、1983年（昭和58年）に分布調査で確認していた4基の円墳のうち3基については、周溝等によって確認することができたが1基についてはすでに消滅しているものと考えられる。また、稜線の頂上部分で2基の古墳が新たに確認された。このため、合計5基の古墳についてそれぞれ周溝・主体部等の調査を実施した。5基の古墳のうち、面影山74号墳の遺存状況がもっとも良好であり、墳形、規模、主体部、築造の方法等、ほぼ全容を明らかにすることができた。75・76・77号墳は、墳丘のほとんどすべてが失われた状態であったが、主体部、周溝等をかろうじて検出することができた。78号墳は、周溝の一部のみの検出にとどまったが、周溝底から本墳に伴うものと考えられる埴輪片、土師器片が検出された。以上、期間、日程、人員など限られた条件の中での調査であったが、検出された遺構、遺物の状況から古墳群の築造時期、築造方法、埋葬方法などについて予想以上の考古学的知見を得ることができた。



第2図 面影山古墳群分布図



第3图 面影山古墳群調査地形実測図



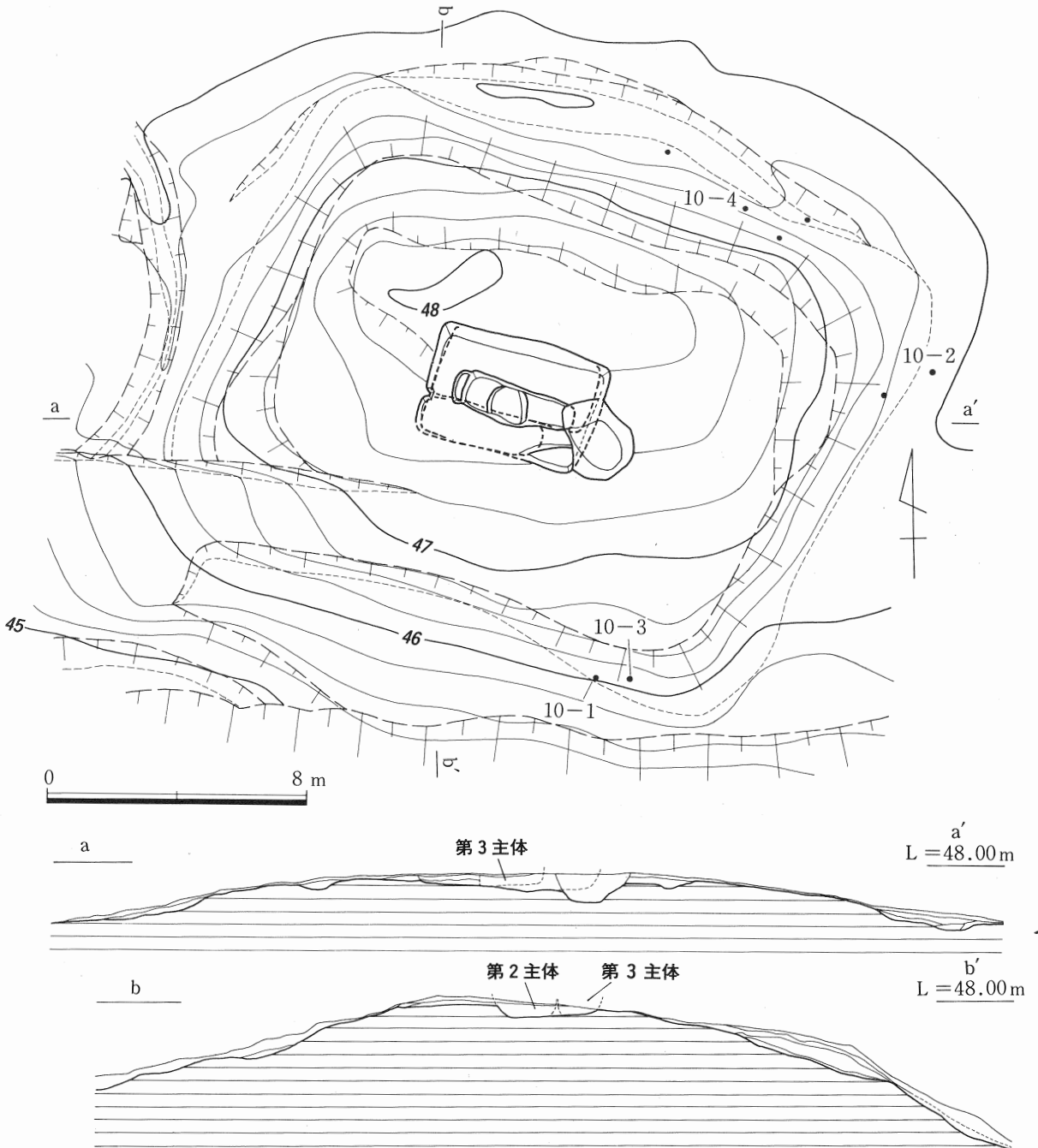
第4図 面影山古墳群調査地遺構配置図

2. 面影山74号墳

墳丘 本墳は、調査地北東端にあたり尾根の最高所に立地する方形墳である。調査前には墳頂面の北側が重機によって若干削平され、墳裾部はその削土によっておおわれていた。南西側コーナー付近の切削は大きく、この方向からは墳丘の存在を想定しがたい。北、東辺部分は比較的旧状をとどめており、明らかな傾斜の変換が認められた。南半面は、墳頂部から墳丘基底部にかけてゆるやかに傾斜し、わずかに墳丘状の高まりを示唆する傾斜の変換点が認められるのみであった。この南面は、トレンチの掘り下げによって厚い暗褐色土が検出され、遺物の出土状況とあわせ墳丘盛土の流失、堆積が激しかったことがうかがわれた。トレンチ調査の後、造成による削土及び表土を全面的に除去すると、盛土のほとんどすべてを流失した古墳であることが判明した。調査時における墳頂部の標高は48mを測り、正蓮寺集落との比高差は38mあまりである。

墳丘は、主軸をN-69°-Wにとり、長軸20m、短軸16mを測る長方形状を呈する。各辺はかならずしも直線ではなく、やや内湾する辺も認められる。墳丘の遺存高は2mを測る。墳頂部南側の一部に約10cm前後の盛土層が認められた。南東～東西の墳丘の遺存状態の良好な部分のコーナー部分の観察では、稜は比較的明瞭であり裾部はやや隅丸となる。周溝状の掘削は北側の辺に認められ

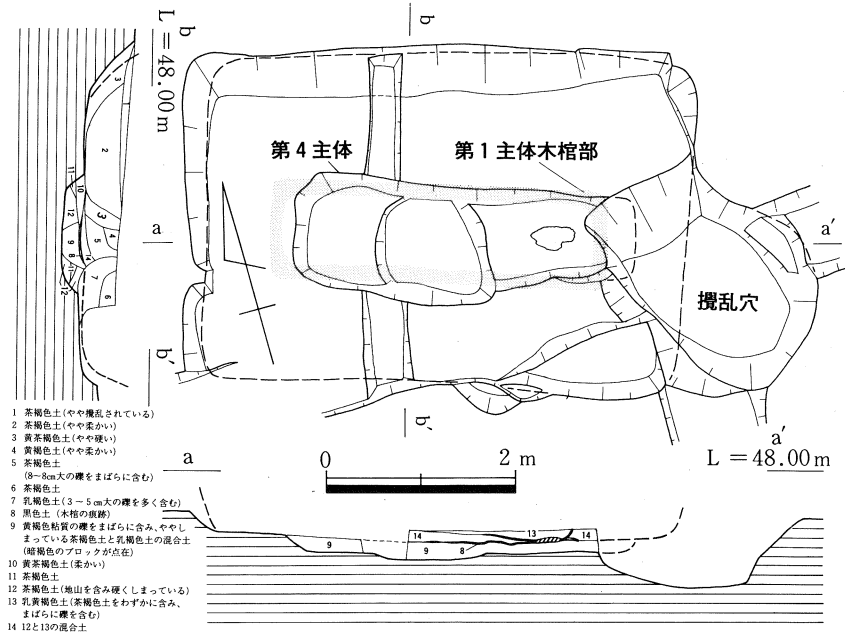
たが、他の各辺は、墳裾部、基底部の削り出しで終わっているようである。北側は、深さ0.2m、幅1mを測り断面は浅い円弧形を呈し、周溝状となる。墳丘の築造は、断面観察から墳丘下半部を地山の削り出しによって造り出し、更に盛土によって墳形を整えていったものと考えられる。なお、葺石等の外表施設は検出していない。



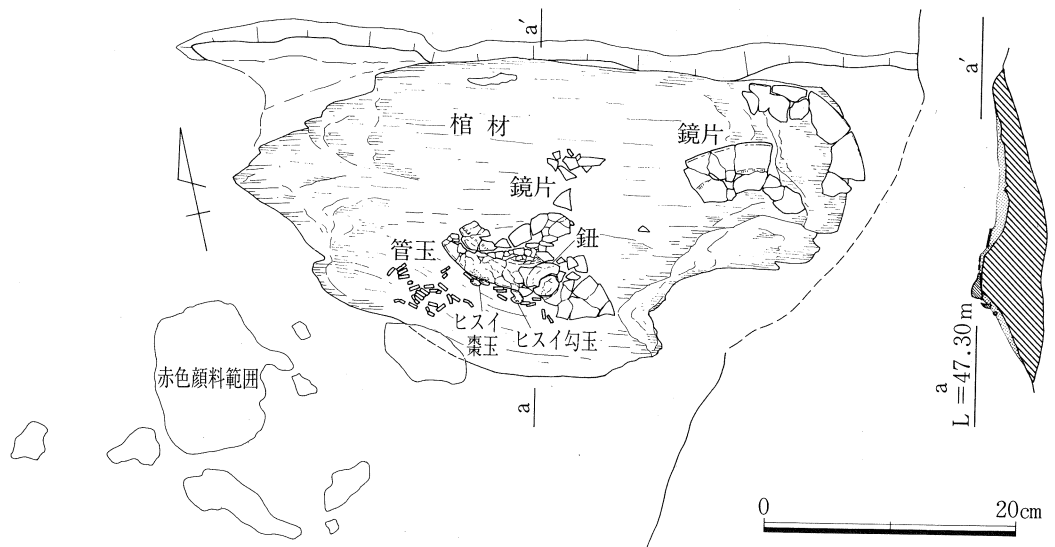
第5図 面影山74号墳墳丘遺存図

遺物は、墳丘北東部及び南東部の墳丘斜面と周溝内から出土している。いずれも土師器で細片が多く、墳丘上から転落したものと考えられる。墳丘南東部の斜面から転倒した状態で出土した焼成前に底部穿孔した壺および高杯杯部は比較的よく原形を保っている。

埋葬施設 墳頂面のはぼ中心で切り合う4基の木棺直葬の土壙墓を検出した。検出面は、盛土が流失しているため旧地表面のレベルにある。盗掘の形跡はなかったが、墳頂部東側に戦時中の塹壕と思われる攪乱穴があり、各主体部の一部を損壊していた。遺物は、第1主体木棺内で検出され、他



第6図 面影山74号墳第1・4主体実測図



第7図 面影山74号墳第1主体西端遺物出土状態実測図

の3基の埋葬施設からは出土していない。

4基の主体部の新旧については、検出面及び縦横断面の土層観察による切り合い関係の検討から第4主体が最初に掘り下げられ、その後第1主体、第2主体、第3主体の順に埋葬されたものと考えられる。

第1主体は、長辺を第2第3主体に切れ、東側の短辺を攪乱穴によって切られるため、正確な法量は不明であるが、木棺については棺材、遺物の遺存と黒色腐植土の拡がりによってお

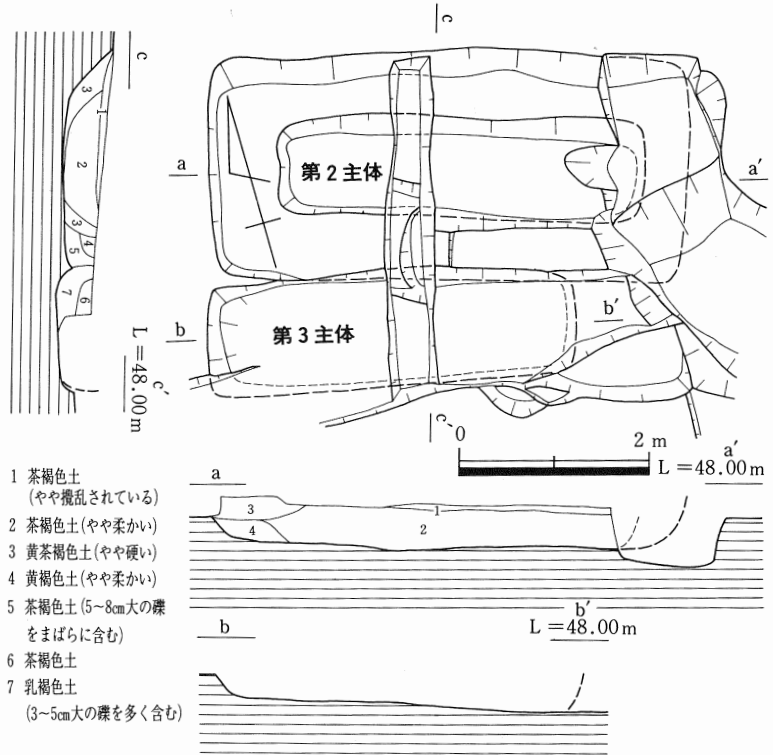
およその規模を知ることができる。長さ3.4m、幅1.1m程の木棺が使用されていたものと推定される。東側には長さ48cm、幅26cm、厚さ4.6cmの棺材の一部が遺存し、その上面に接して赤色顔料、破碎されて破片となった内行花文鏡1面、ヒスイ勾玉1、同橐玉2、碧玉製管玉30が出土した。遺存していた棺材の一部は、主体部の断面観察、玉類の出土状態などから考えれば木棺の底板の一部と考えられる。

第2主体は、主軸をN-73°-Wにとり、他の主体部とほぼ同じになる。墓壙は長軸推定5.0m、短軸2.5m、深さ0.5mを測る。北側長辺は、第1主体ないしは第4主体のそれとほぼ重複し、底面は、第1主体の棺床面とやや低いレベルに位置する。南側長辺は第3主体と切り合うことが西側の検出面での埋土の観察から明らかである。埋土の断面観察によれば、木棺を直葬したのと考えられるが、本主体部の木棺は、先行する第1主体を意識しその掘り方に沿って土壌を掘り下げ、第1主体の木棺の横に埋置した状態を見てとることもできる。

第3主体は、第2主体の南側長辺をわずかに切って掘り込まれており、主軸は他の主体部とほぼ同じである。長軸3.9m、短軸1.2m、深さ0.4mを測る土壌内に木棺が埋納されたものと考えられる。

第4主体は、第1主体の下から墓壙の一部を検出した。長軸推定3.6m、短軸1.2mであり、第1主体の棺床からの深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

出土遺物 74号墳の遺物は、第1主体から出土した銅鏡、玉類と墳丘から出土した土師器だけで鉄

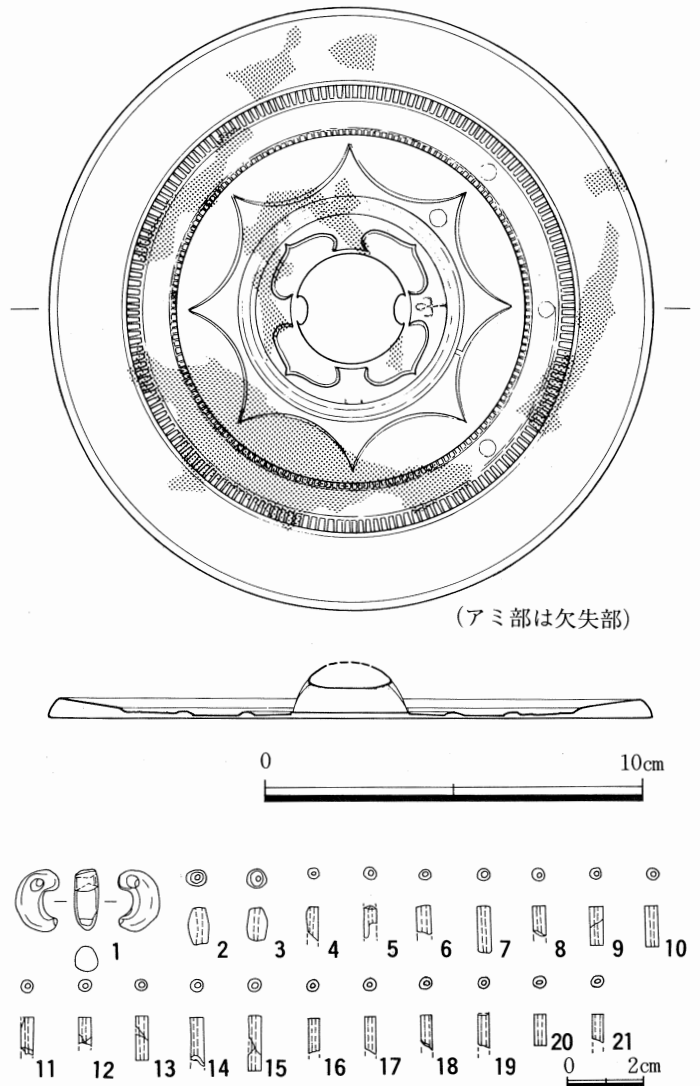


第8図 面影山74号墳第2・3主体実測図

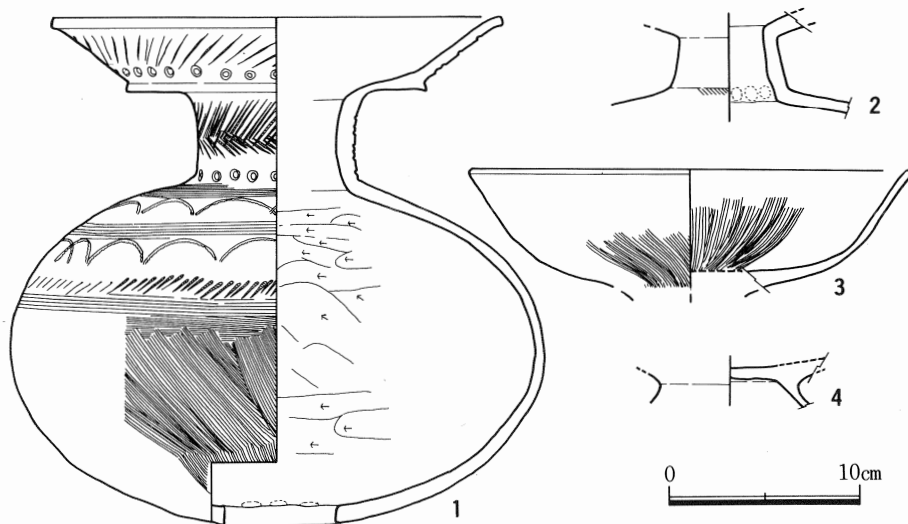
製品は出土していない。銅鏡は、人為的に破碎されたことを示唆する状態で出土した。鏡は、長生宜子銘を持つと考えられる内行花文鏡であるが、各文様は不鮮明である。鈕座は四葉座で、外に平頂素圏がめぐり、その外に8つの内行花文が配される。花文の外側には柳歯文帯にはさまれた雲雷文が見てとれる。外縁は幅広無文である。残存している四葉座間には長、子のとなりあった2文字がかすかに読みとれる。接合復元径16cm。

墳丘から出土した土師器は細片が多く今回実測できたのは壺2点、高杯2点である。壺は大きく開く複合口縁を持つものでこれまで鳥取県では類例の知られていないものである。筒状の直立する頸部と最大胴径を中位に持つ球形を押しつぶしたような体部を持つ。座部には径5.9cmの焼成前の穿孔を持つ。口縁部から胴部上半にかけて竹管、貝殻腹縁などを使って刺突文様を施す。胴部下半外面斜

位のハケ目、胴部内面横ヘラ削り、底位には指頭圧痕が残る。色調は、褐色を呈する。高杯はやや内湾しながら立ち上がり端部で外反する杯部を持つ。内外面ともハケ目調整のままで終る。



第9図 面影山74号墳第1主体出土鏡（復元）、玉類実測図



第10図 面影山74号墳墳丘出土土師器実測図

3. 面影山75号墳

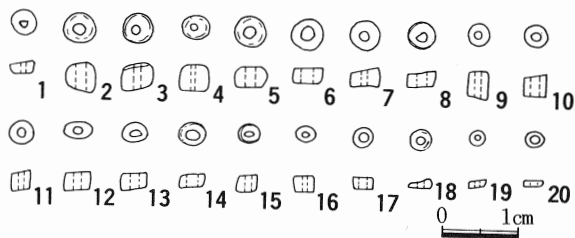
墳丘・周溝 74号墳の西側に位置するやや楕円形を呈する円墳で、周溝は74号墳の墳裾部と重複する。この切り合い関係から74号墳が先行することを示している。墳丘の長径は、推定13m、短径は11mを測る。西側からのみかけの高さは2m程である。南側は重機による切削で失われ、築造当初にはあったと考えられる盛土もほとんどすべて流失している。周溝は東側の遺存部分で幅1m、深さ0.3mを測り、断面は浅いU字形を呈する。

埋葬施設 墳丘のやや東寄りの位置で浅い土壙墓を1基検出した。土壙は主軸をN-18°-Eにとり規模は、推定長軸3.1m、短軸1.4m、現状での深さは0.25mを測る。検出面での平面形は隅丸長方形である。二段に掘り込まれ、底部の断面形は円弧状を呈する。土壙底部の北東側で大小2対の角礫を検出した。この角礫の周辺から1500点弱のガラス玉が出土しており、石枕の可能性もある。

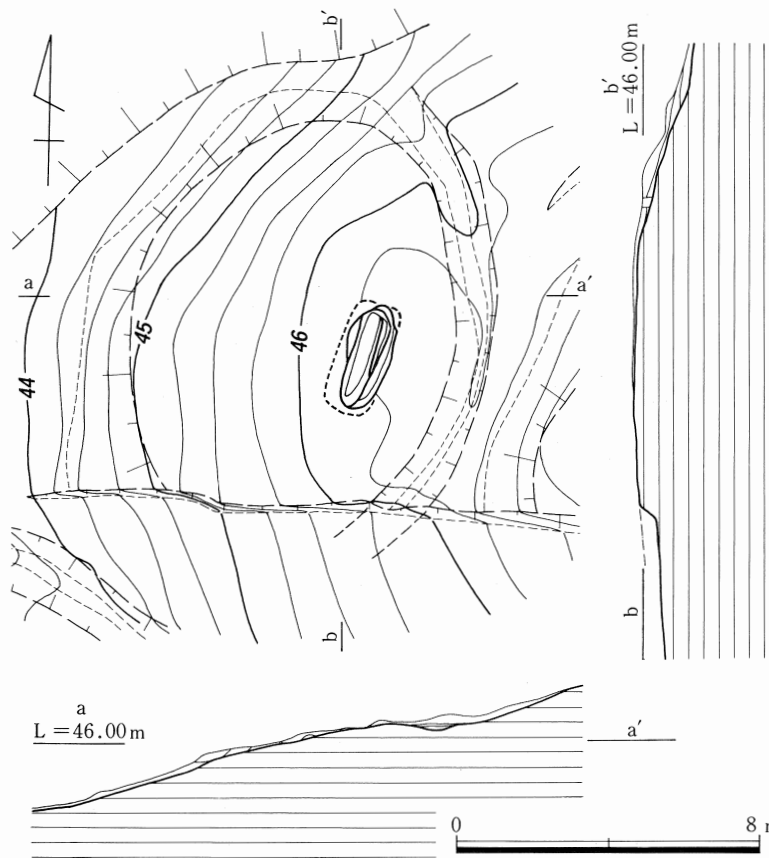
土壙内の埋土断面の状況は、被葬者の埋置に際して木棺が使用されたことを示唆してはいるが、その形状、構造等の詳細については今後の検討にゆだねたい。

出土遺物 75号からの出土遺物は、土壙底で

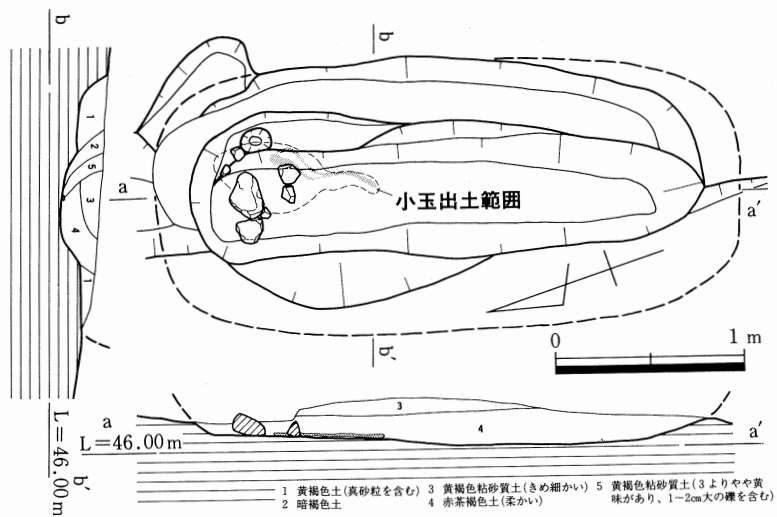
検出したガラス製の小玉（粟玉）だけで、他の土器類鉄器類は認められなかった。ガラス玉のうち1点は黒色を呈するもので他はすべて赤褐色を呈する。完形のが1467点、約半に破損するものが30点、それ以下に破損しているものが約80点あり、本来は1500点以上あったものと考えられる。赤褐色の小玉の形



第11図 面影山75号墳主体部出土小玉実測図



第12図 面影山75号墳墳丘遺存図



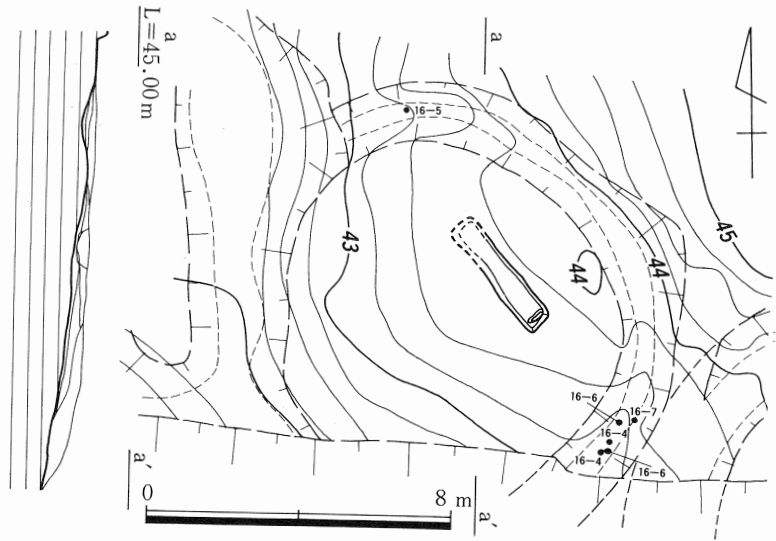
第13図 面影山75号墳主体部実測図

態は大小様々あるが、最大径4.5mm前後、最小径2.2mm前後、最大長4mm、最小長0.9mmの範囲におさまる。孔と平行に黒の縦縞が入り、気泡、溶滓粒が認められる。

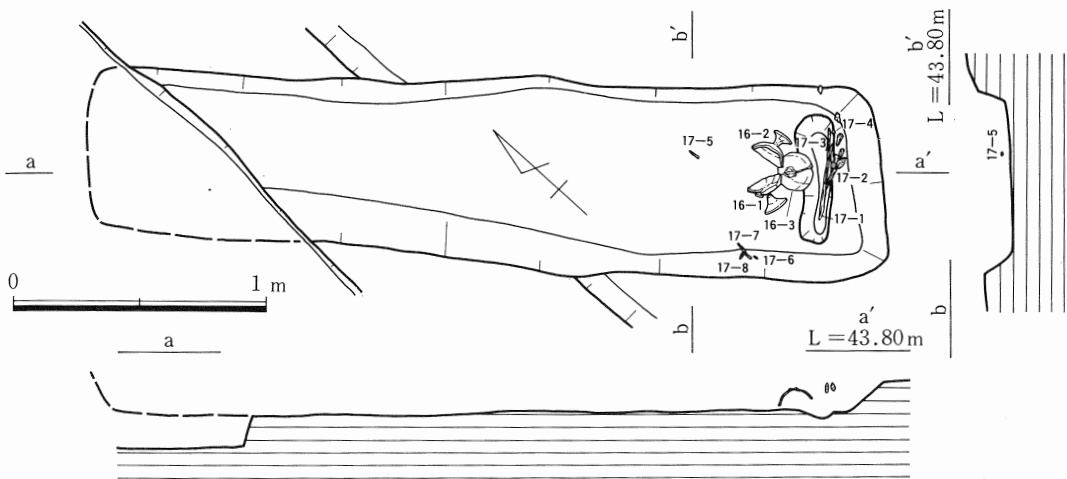
4. 面影山76号墳

墳丘・周溝 75号墳の南西方向2mの位置にあって77号墳と78号墳の間に立地する円墳である。墳丘は、旧地表面まで重機によって切削されたのち、その削土におおわれて平坦地となっていた。しかし、トレンチの掘り下げによって盛土下の黒色旧表土層及び周溝埋土を確認し、さらに削土を全面的に除去することによって古墳の形状を明らかにすることができた。墳丘盛土はすべて失われ、南側では周溝及び墳丘の一部が削り取られ崖状を呈している。周溝の西側は、77号墳と切り合い、その関係は本墳が先行することを示している。墳丘の直径は、11m程であると推定される。周溝は、比較的遺存状況の良好な北側で幅1.6m、深さ0.4mを測る。周溝内から74号墳と同様の底部を穿孔した壺、高杯等の土師器が出土している。

埋葬施設 墳丘盛土下旧地表面に掘り込まれた木棺直葬と考えられる土壙墓1基を検出した。主軸をN-37°-Wにとり、長軸推定3.1m、短軸0.8m、現状での深さは0.15mを測る。土



第14図 面影山76号墳墳丘遺存図

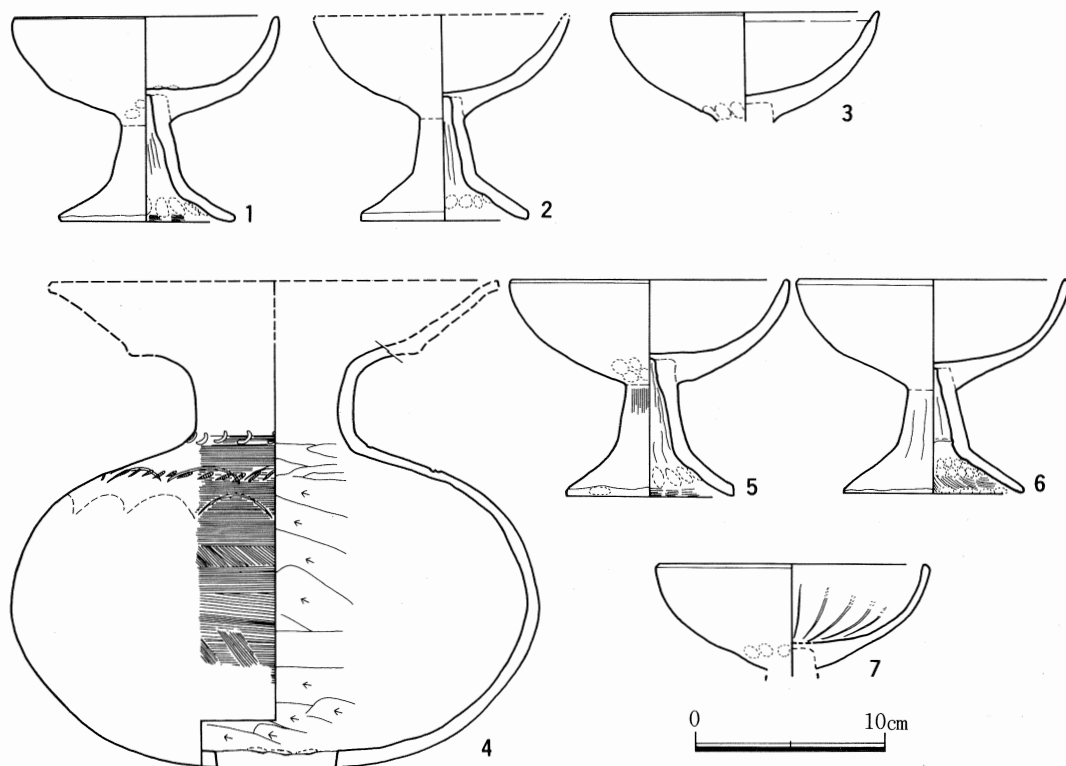


第15図 面影山76号墳主体部実測図

壙の南東側で土師器高杯3個体を組み合せた土器枕を検出した。この他土壙の南東側小口部から小口に平行して鉄剣1、鉞2が、また、中央寄りで鉄鏃2が出土している。鉄器類は、出土状態から棺外に副葬されたものと考えられる。土器枕は、脚部を取り去った椀状の杯部を中央にふせて置き、その左右から完形の高杯を立てかけるものである。また、土壙内外から打ち欠かれた高杯脚部が出土している。土器枕の中央で使用されている高杯の脚部と考えられる。

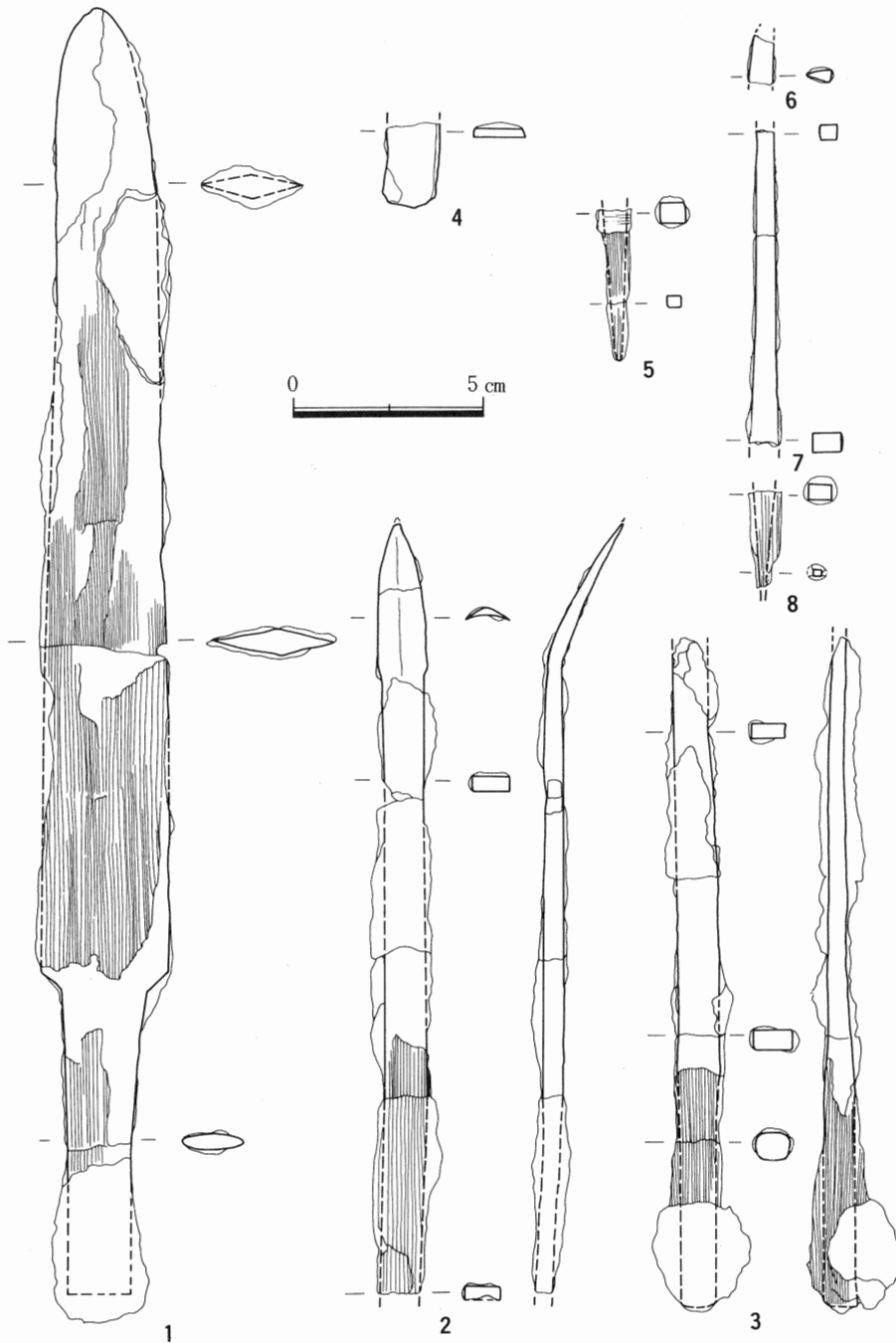
出土遺物 周溝から壺1、高杯3、主体部から高杯3の土師器が、主体部棺外から鉄剣1、鉄鏃2、不明鉄製品1が出土した。壺は、口縁部を欠失するが、74号墳出土の壺と同様底部を焼成前に穿孔し、頸部から肩部にかけて半載竹管、貝殻腹縁、ハケ状工具で刺突した文様を施す。形態は、74号墳のものと同様である。外面の頸部以下をハケメ調整、内面をヘラケズリし、底部内面には指頭圧痕が残る。色調は、外面暗褐色、内面黒色を呈する。高杯は、周溝、主体部ともに同様の形態・調整技法を持つ。杯部は椀状で、脚柱部から屈曲して裾部となる脚を持つ。口径14~15cm、器高11cm強である。杯部外面及び脚裾部には指頭圧痕が残る。脚柱部にはしぼり目が認められる。裾部内面のハケ目は簡単である。

鉄剣は全長34.3cm、刃部長25.8cmで、関は傾斜する。全体に木質が遺存する。鉄鏃は、茎部のみ遺存するもの1と片刃の長頸鏃1がある。



第16図 面影山76号墳出土土師器実測図

鉈は、2点出土している。同型であるが刃部が残るものは1点のみである。ともに柄には木質が残る。刃部は、剣先形となり、裏面は湾曲し、柄部から強く屈曲する。先端を欠失するが刃部長は、約4cmと推定される。



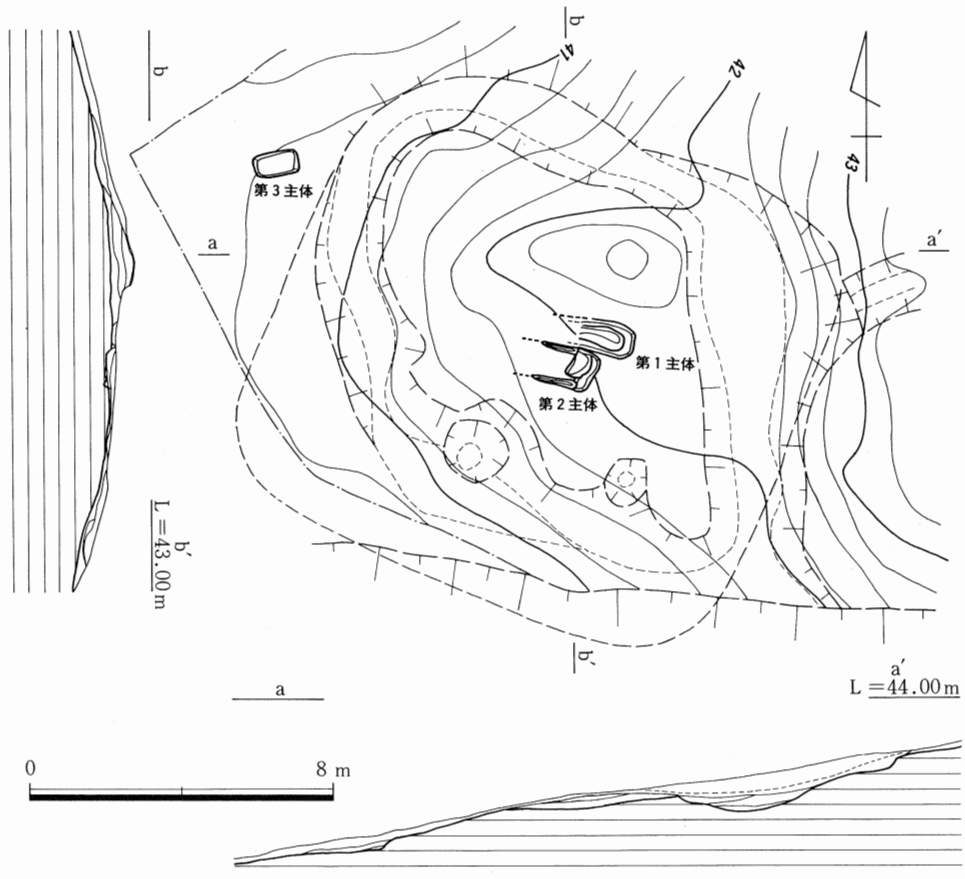
第17図 面影山76号墳出土鉄器実測図

5. 面影山77号墳

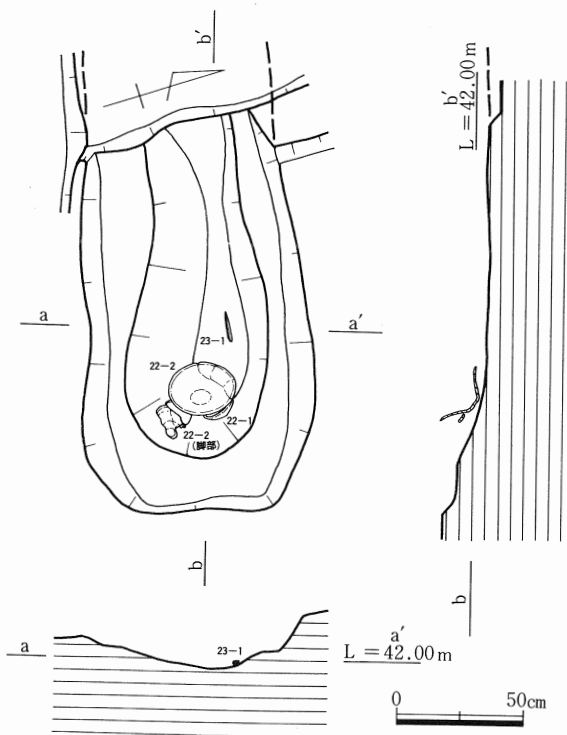
墳丘・周溝 調査地尾根の西端に位置し、すぐ西側を正蓮寺、大杙間の峠道が通る。遺存する墳丘の標高は42.6mを測り74号墳との比高差は5.4mである。調査前には高まりも認められず、古墳としての形状を観察しえなかったが、削土及び北側の表土を除去し検出した周溝を掘り下げた結果、方形を呈する可能性が強いと判断された。墳丘は、かなり原形をそこなっているが北側に盛土の一部が遺存し、その下層に黒色旧表土が認められた。墳丘は、一辺12m程の隅丸正方形に復元できるが、周溝を含めて全体に遺存状況は良好ではない。現状での墳丘高は1mを測り、主軸をN-69°-Wに向ける。この主軸方向にそって77・76・78号墳は直線的に築造されている。

埋葬施設 墳丘のほぼ中央に、隣接する2基の土壙墓を検出した。西側は調査時には切削されており、それぞれ東側の一部のみかろうじて残っている。第1、第2主体ともに主軸をN-78°-Wにとり、旧表土層に掘り込まれている。また、西側周溝の外周から1mの位置で小型の箱式石棺（第3主体）を検出した。

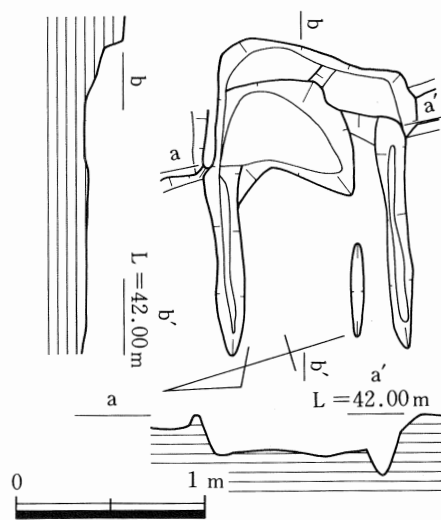
第1主体は、遺存部の形状から二段に掘り込まれたやや不整な隅丸長方形を呈する土壙墓と考え



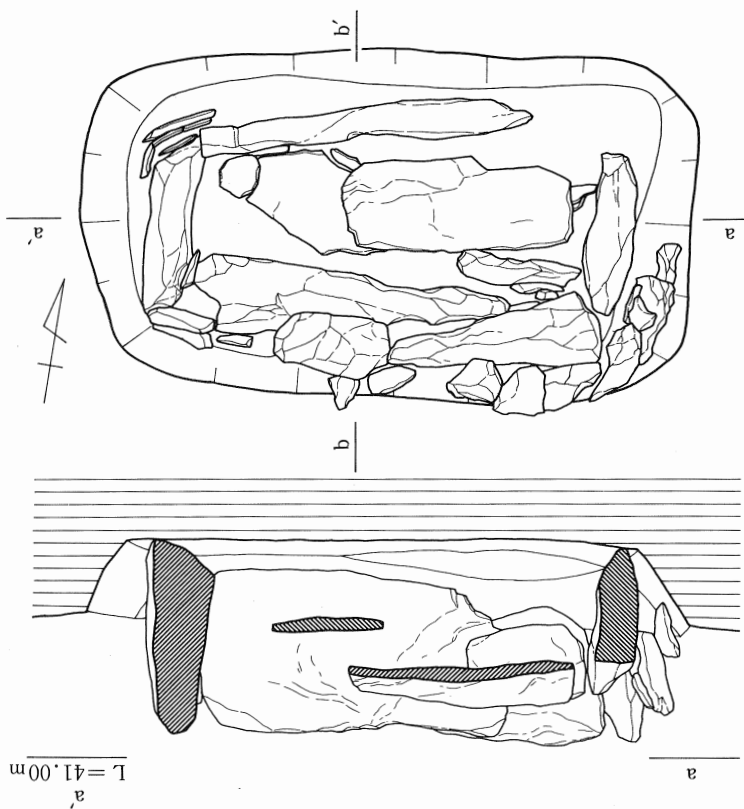
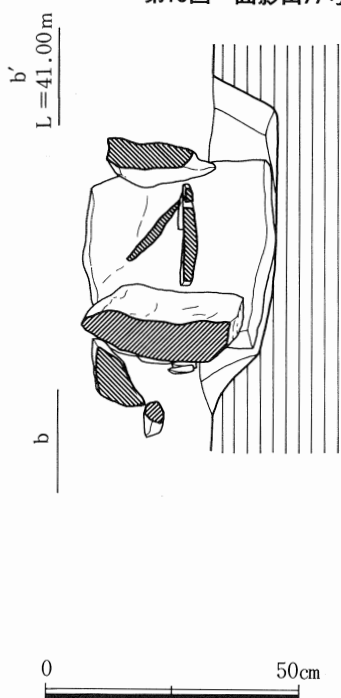
第18図 面影山77号墳墳丘遺存図



第19图 面影山77号墳第1主体实测图

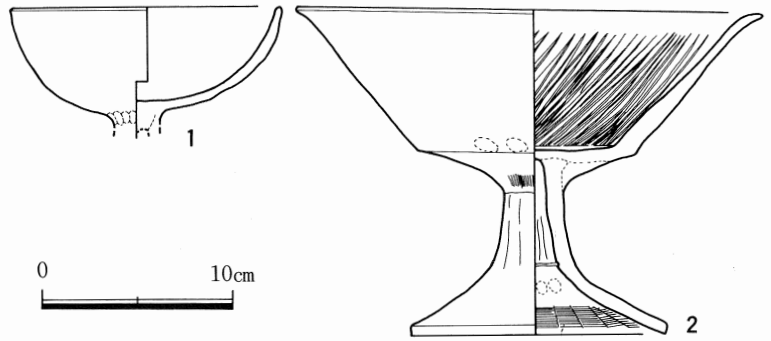


第20图 面影山77号墳第2主体实测图



第21图 面影山77号墳第3主体实测图

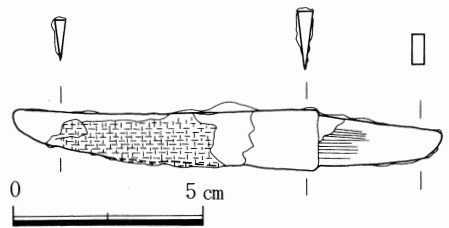
られる。長軸は計測不可能であるが、短軸0.9m、検出面からの深さ0.2mを測る。木棺の使用については確認することができなかった。土壌内の東側で土器枕を検出し、その西寄りで刀子1が出土した。土器枕は、



第22図 面影山77号墳第1主体出土土器実測図

大型有段高杯の脚部と脚を取り去った小型高杯を支えとし、前者の杯部で頭部を受けるように設置されていた。このことから頭位は東にあったと理解することができる。

第2主体は、東側の一部のみ残しており、全体の形状、規模については不明である。遺存部の短軸は1mを測る。長辺にそって細長い溝状の掘り込みがなされており木棺の側板溝とも考えられる。しかし、土壌内



第23図 面影山78号墳第1主体出土刀子実測図

埋土には攪乱を受けた形跡が認められること、また、規模の点からも現状では明らかに埋葬主体であると判断し難い部分が残る。遺物は出土していない。

第3主体は、主軸をN-82°-Eにとる小型の箱式石棺である。北側の一部を失ない。蓋石と考えられる板石が棺内に落ち込んだ状態で検出された。平面形は、東側の小口幅がやや広くなる形をとり、規模は内法で長さ0.75m、東側小口幅0.27m、西側小口幅0.22mである。石棺は、小口部を1石、側辺を2石で構成し、隅部はそれぞれの端部をつき合せて箱形とする。石材の形状は各々バラツキがあり、そのため生じた間隙を中小の角礫でふさぎ補強している。石棺の床面は明確に検出しえなかったが、側石の上面から掘り方底面までの深さは0.4mである。掘り方は長軸1.2m、短軸0.68m、検出面からの深さ0.17mを測り、底部はおおむね平坦である。棺内外に遺物は検出されなかった。なお、石材は、近傍の大路山に露頭している流紋岩と同種のもので、側石、小口石の一部にノミによって調整した切削加工痕が認められる。

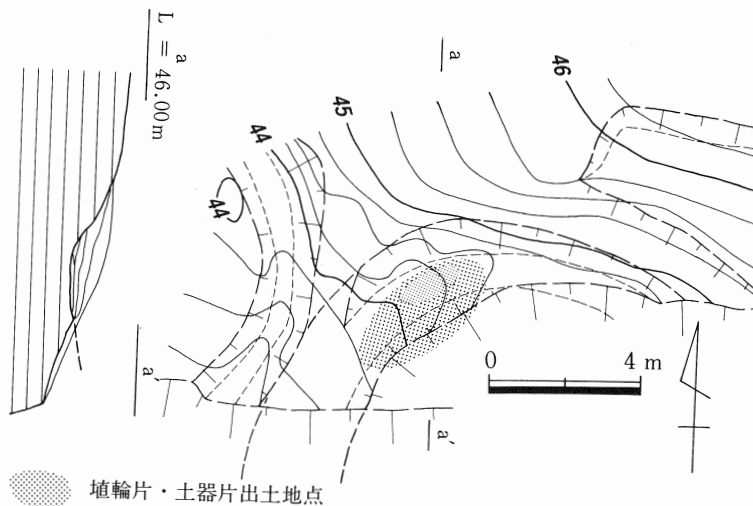
出土遺物 77号墳の遺物には墳丘の攪乱土中から出土した敲石1、第1主体から出土した刀子1、高杯2がある。刀子は、全長11.4cm、刃部長8.1cmで関は両関である。刃部に布目が残る。高杯はともに枕として利用されていたものである。大型の高杯の杯部は、段を持ち外方に大きく開く。口径24.6cmを測る。取りはずされていた脚部は、脚柱部から、裾端部へ向けて大きく開く。脚柱部内面にシボリ目、裾部内面に指頭圧痕、ハケ目が残る。裾端部はヨコナデによって調整する。杯部内面には放射状暗文を施す。小型の高杯は、椀状を呈する杯部を持つ。ともに赤彩を施す。

6. 面影山78号墳

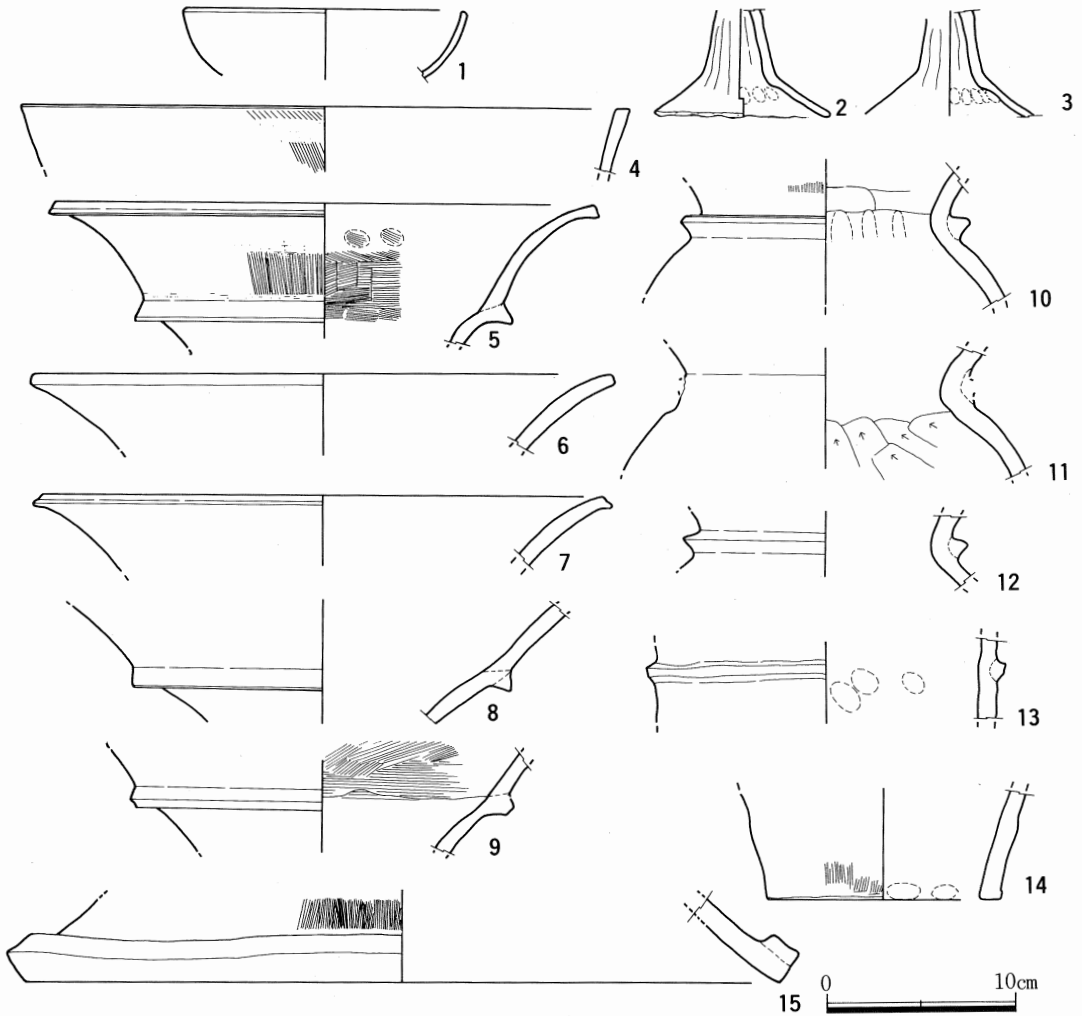
墳丘・周溝 第2トレンチの断面観察によってその存在が確認された古墳である。76号墳の南東側に隣接して築造されていたものと考えられるが、造成によって周溝のごく一部を残すのみである。墳丘、主体部等の詳細は不明であるが、規模は残存する周溝の形状から直径12m程度の円墳であったと推定される。遺存する周溝の幅は2.4m、深さは1mを測り、第24図に示す位置で朝顔形などの円筒埴輪片、土師器高杯、少量の須恵器片が出土している。原位置を保っているかどうかは別として本墳に関連する遺物であると考えられる。

出土遺物 埴輪は、朝顔形円筒埴輪を主とし、ほかに普通円筒、蓋形埴輪が少量認められる。いずれも細片であり、器面の剝落も激しい。朝顔形埴輪は、復元口径30cm前後の大きく開く口縁部で中位に凸帯等で段を表現する。屈曲部の凸帯の形状、貼付方法にはいくつかの種類が認められる。基底部は、復元径12.5cmで外方に立ち上がり、胴部は20cm前後の径となるようである。調整技法の観察できるものの中には特徴的なヨコハケを施すものも認められる。蓋形埴輪は笠の部分と考えられ、復元径41.5cmを測る。埴輪はいずれも褐色を呈し、黒斑が観察できる。

高杯は、椀状を呈する杯部を持ち、脚柱部から屈曲して裾部にいたる脚を打つものと思われる。脚裾部内面のハケ目は省略される。須恵器は壺甕類の胴部破片で、外面は平行のタタキ目、内面は半スリ消しによって調整する。



第24図 面影山78号墳墳丘遺存図



第25図 面影山78号墳周溝内出土土器実測図

IV まとめにかえて

前章で今回の発掘調査によって検出した5基の古墳について簡単な概要を記した。最後にそれらを要約し、いくつかの問題点を抽出してまとめにかえたい。

調査した5基の古墳は、鳥取平野内の独立丘陵である面影山に所在し、平野南部を一望することのできる高所に築造されている。これらの古墳は、調査地の最高所に位置する74号墳を核として裾を接するように営なまれており、稜線、稜線下の丘陵斜面と並列的な配置をとる。すなわち、主稜線上の74・75号墳に対して、76～78号墳は南側のやや丘陵斜面にかかる位置に立地する。

5基の古墳は、いずれもが何らかの形で後世の削平等を受けていたが、墳形、基本的な墳丘の築造方法については、ほぼ理解することができた。墳丘の築造方法は、74・75号墳が地山の削り出し

と盛土をもって行ない、76号墳以下では周溝の掘削と盛土で墳丘を造り出す。これは、前者が丘陵の頂部ないしは稜線上に立地し、自然地形を最大限に利用することができるのに対し、後者が自然地形によってあまり高さを強調することのできない場所に立地しているためとも考えられる。墳形は、方形、円形の二種が認められる。方（形）墳は、従来から出雲を中心とした山陰地域に多い墳形とされていたが、因幡での確認例は稀であった。しかし、近年の分布調査、発掘調査によって、前・中期に築造されたと考えられる古墳を中心に類例は増加しつつある。これらの方（形）墳は、弥生時代の墳基の伝統を強く受け継ぐものと考えられる。地山を長方形に削り出した74号墳も、これらの古墳の範疇に含まれるものである。

埋葬施設は、77号墳の墳丘外で検出された小型の箱式石棺の他は土壙に木棺を埋納したと考えられるものであった。遺存状態の良好な埋葬主体は少なかったが、いくつかの点で興味ある資料を得た。5基の古墳のうち76・77号墳からは、鳥取県に分布の中心をもつ土師器枕が検出されている。双方とも高杯を組み合わせて枕としたものであるが、これまで類例の知られていない組み方である。また、箱式石棺の棺材の一部には明瞭な切削加工痕が残っており、注意を引く。

出土遺物は、総量としては少ないものの特徴ある遺物が出土している。とりわけ、74号墳から出土した土師器、鏡、玉類、木棺材は、類例のないものだけに今後とも論議をよぶものと思われる。鏡は、長生宜子銘が入ると考えられる内行花文鏡で、鳥取県内では初見である。鳥取市桂見2号墳の例と同様、故意に破碎された状態で出土している。また、銘、雲雷文などの各文様が非常に不鮮明であることにも注意しておきたい。土師器壺も県内では類例の少ない形態である。しかし、竹管、貝殻腹縁などの刺突文様は、弥生時代に直接的な系譜を求めることのできる山陰的な文様といえる。一方、成形・調整技法には、新しい要素が認められる。また、焼成前の穿孔など仮器化した内容も見えてくる。75号墳からは、1基の埋葬施設から出土した玉の数量としては県内最多と考えられる約1500個ものガラス小玉が出土した。黒色の1点を除き、すべて還元状態の銅によって着色された赤褐色を呈するものである。

最後に調査古墳の築造時期に触れておきたい。各古墳から出土した土器類は、いずれも古墳時代中期の所産になるものと考えられる。このことから、各古墳とも古墳時代中期、5世紀代に築造されたものとはここでは推定しておきたい。墳丘、周溝の切り合い関係によって74号墳→75号墳、76号墳→77号墳という築造順が確認されている。立地、出土遺物からすれば、前者から後者へという序列が推定できる。ただし、74号墳の4基の埋葬主体の様相からは、各古墳が連続して築造されたと考えられず、74号墳と75号墳以下には若干築造時期に空隙があったものと思われる。

本調査の実施にあたっては、県内外研究者の御教示を得た。また、出土遺物のうち銅鏡、ガラス玉、赤色顔料、木棺材については、各専門研究者の御協力を得て理化学的な分析をお願いしていることは付言しておきたい。成果については、別途報告したい。

第1表 面影山古墳群詳調査結果一覧表

古墳名	墳丘形状・規模	埋葬				葬施			施設			出土			遺物		備考
		主体番号	平面形態	長軸×短軸×深さ cm	埋葬方法	棺構造 (長さ×幅×高さ) cm	埋内	葬施	施設	外	墳丘・周溝	構	物	備	考		
																高杯	
面影山 74	方 20×(16) ×(2)	第1主体部	隅丸長方形	(500)×(350)×74	木棺直葬	(360)×(105)×?	内行花文鏡 ヒスイ勾玉 ヒスイ繫玉 碧玉管玉 朱	—	—	—	高杯 1	—	木棺材の 一部遺存	墳頂部 盛土流出 墳一部 削平			
		第2主体部	隅丸長方形	(500)×250×50	木棺直葬	(380)×110×50	—	—	—	—	壺 2	—	—				
		第3主体部	隅丸長方形	(390)×120×40	木棺直葬	?	—	—	—	—	土師器片	—	—				
		第4主体部	隅丸長方形	(500)×(350)×74	木棺直葬	(360)×120×20	—	—	—	—	—	—	—				
面影山 75	円形 (13)×2.0		隅丸長方形	(310)×(140)×25	木棺直葬	270×70×20	小玉 約1,500 角礫(枕?)	—	—	—	—	盛土流出					
面影山 76	円形 11×(0.32)		隅丸長方形	(310)×80×15	木棺直葬	—	高杯 3 (土師器転用枕)	鉄剣 1 鉄鉢 2 鉄鏝 4片 不明鉄製品 1	—	—	—	墳丘削平					
面影山 77	方形(?) (12)×(12) ×1	第1主体部	隅丸長方形 (?)	?×90×22	木棺直葬	—	高杯 2 (土師器転用枕) 刀子 1	—	—	—	土師器片	—	木棺直葬 の可能性 あり 攪乱痕の 可能性あ り	墳丘削平			
		第2主体部	隅丸長方形 (?)	?×104×23	?	—	—	—	—	—	—	—	墳丘外の 埋葬施設				
		第3主体部	隅丸長方形	120×68×17	箱式石棺	100×50×40 (内法)75×27×25	—	—	—	—	—	—	墳丘の一 部が残存				
面影山 78	円形 (径12m前後)																

(注) 墳丘及び埋葬施設の計測値はすべて現状でのものである。() を付した計測値は推定値である。

吉岡遺跡



I. 発掘調査に至る経過

鳥取市域の西南部分を占める湖南地区は、湖南の名のとおり湖山池南岸に広がる山紫水明の地である。その中心となるのが、静かに湯けむりのあがる吉岡温泉町である。千年以上の歴史を持つといわれる温泉は、現在でも湧きでる湯量も豊富で市民のみならず県外から訪れる人も多い。

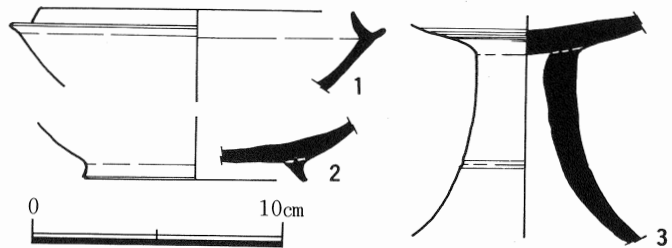
この湖南地区は、これまで大規模な開発事業が実施されることも少なかった。このため、原史・古代遺跡の分布調査も組織的には行なわれておらず、遺跡分布図でも空白が多く考古学的に未知の部分の多い地域であった。しかし、近年では、「明日の湖南を考える会」を中心とする郷土を愛する人々や民間研究者の遺跡踏査、研究が進められている。これらの人々の努力と熱意は、湖南地区の遺跡分布を明らかにするだけでなく、葦岡長者古墳（吉岡1号墳）を初めとする温泉街西側丘陵（馬場山）の古墳群の保存・整備にも発揮され、大きく結実している。

今回、調査の対象となった温泉街南側の水田地帯から、須恵器など古代の焼物が出土することは、比較的古くから知られていたようである（第26図1、2）。しかし、遺跡の種類や時期など明らかでなかったこともあり、広く一般に周知されず遺跡分布図にも掲載されてはいなかった。

さて、調査地周辺の水田は、古湖山川の開析した谷あい自然地形を巧みに利用して拓かれているもので、労働力の節減・効率化といった水田経営の近代化への大きな障害となっていた。このため、用排水路、農道の整備、水田の区画整理を目的とした「団体営吉岡地区ほ場整備事業」が昭和61年度から実施されることとなった。

昭和61年11月、鳥取市に本社を置く報道機関の担当記者によって、吉岡温泉町内のほ場整備事業地内から採集したという須恵器高杯の脚部と下駄などの木製品が鳥取市教育委員会に持ち込まれた。これらの遺物は、ほ場整備地内の北側から採取されたものとのことで、下駄はともかく須恵器（第26図3）は、古墳時代後期から奈良時代の所産になるものと思われた。このため、鳥取市教育委員会では、鳥取県教育委員会の指導を仰ぐとともに、事業担当課である鳥取市農林水産部耕地課に事業の概要について説明を求めた。この間、県道西側で実施されているほ場整備事業地内全域の踏査をしたところ、南側部分の字大海を中心とした地域に多量の布目瓦が出土していることが判明した。

この布目瓦とともに単弁12弁蓮華文軒丸瓦や礎石とも考えられる自然石（図版9の4）も発見され、奈良時代初頭を中心とした時期に寺院などの遺構が存在するであろうことが想定されるに至った。しかし、ほ場整備事業は、昭和61年度工事施行区域にあっては



第26図 吉岡遺跡表採土器実測図
(1、2は白岩庄市氏採集)

切土・掘削の工事をすでに終了しており、後は盛土及び耕土を返す作業が残っている状態であった。

この後、現地での状況をふまえて、事業担当課である耕地課と遺跡の保護方法について協議することとなった。また、地権者である農家の代表の方々には、当該地が遺跡であることについて理解とその保護をお願いした。耕地課との協議内容は、現在工事实施中の県道西側部分と、かつて須恵器などが出土したといわれる県道東側の昭和62年度工事施行予定地内の遺跡保護をどのように進めていくかということであった。協議の結果字大海を中心とする古代瓦出土地を含む昭和61年度工事区域は、新たな削平、掘削が行なわれないということもあり、事業者の協力によって遺構等の遺存状態を土層の確認によって行うこと、昭和62年度工事区域については、遺跡の保護・保存方法の検討がなされない限りは場整備事業計画そのものに大きな影響を与えることとなるため、遺跡の範囲、性格などを把握するための発掘調査を実施して工事との調整をはかることとなった。

市教育委員会では、事業者との協議内容にもとづき、文化庁、鳥取県教育委員会に発掘調査についての協力をお願いし、昭和61年度国庫補助事業として実施中の埋蔵文化財緊急発掘調査事業の変更申請を行ない、急拠、発掘調査を実施することとなった。調査対象区域は、県道矢矯松原線東側の昭和62年度ほ場整備事業施行予定地に限ることとし、現地での発掘調査は、昭和61年11月17日に開始し12月15日に終了した。以後、昭和62年3月20日まで整理作業を実施した。

発掘調査は、昭和62年度ほ場整備事業施行予定地に合計14本のトレンチ（2m×15m 2本、2m×10m 12本）を設定して行ない、発掘調査の総面積は300㎡である。また、一部のトレンチについては、発掘終了後埋め戻しを行なった。

II 遺跡の位置と歴史的環境

吉岡遺跡は、鳥取市吉岡温泉町地内に所在する。吉岡温泉町は、鳥取駅より県道鳥取・鹿野・倉吉線を西へ8km、「長者伝説」で知られる湖山池の南西部松原地区より、さらに県道矢矯・松原線を2km程南下した位置にある。

吉岡温泉町は、その名の示す通り古来より豊富な泉源をもつ湯治場として知られ、湖山池に近く山柴水明の自然環境に恵まれた保養地として市民に親しまれ、今後の発展が期待されている。現在の温泉街は、先端部を平野へ半島状に突き出す標高50m前後の通称馬場山と呼ばれる低丘陵の東側の県道沿いに営まれている。東側は箕上山（標高297.1m）山塊に連なる丘陵が張り出す。遺跡は人家がとぎれるあたりから、県道の両側に展開する谷あいの水田地帯に所在する。

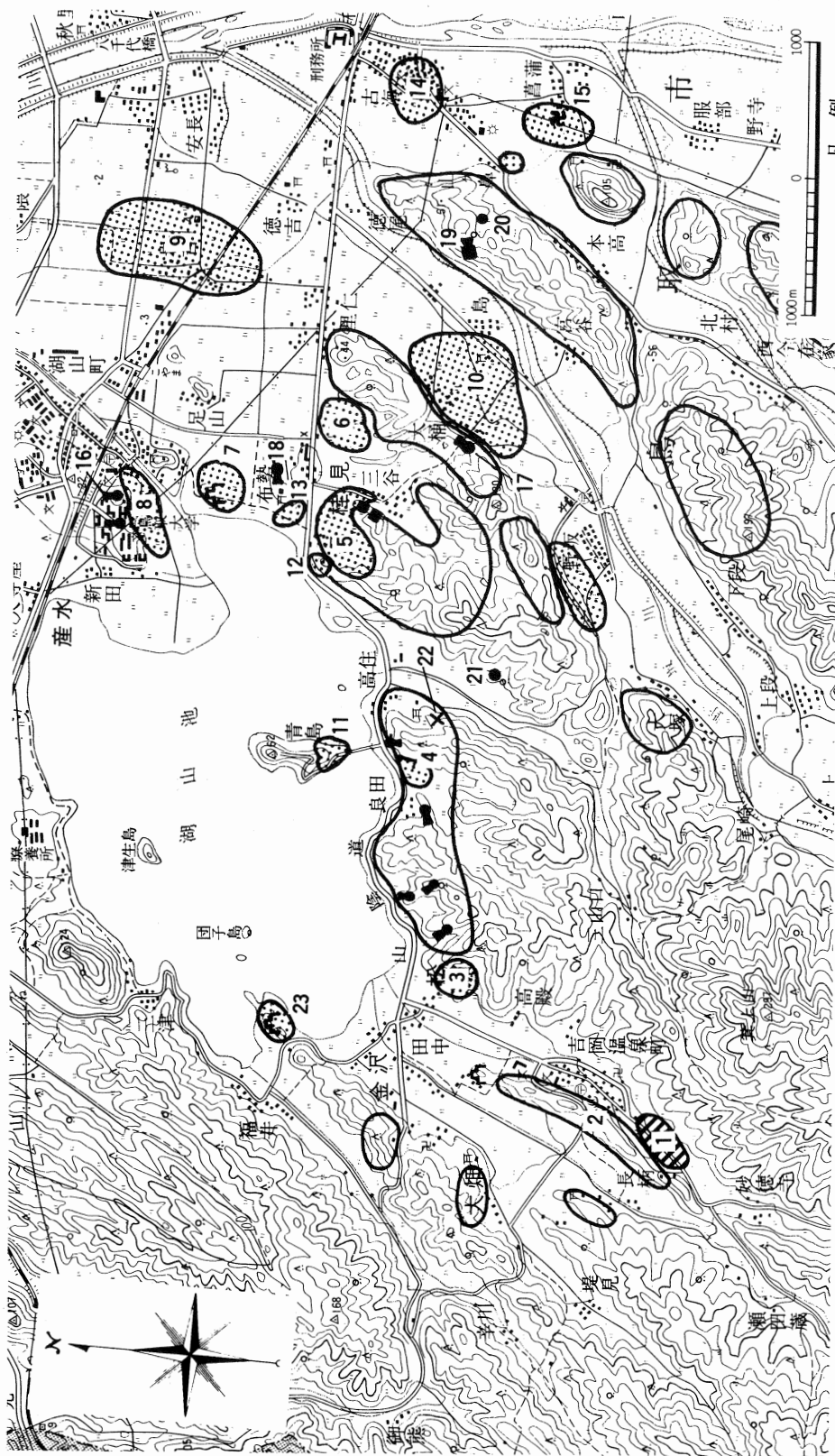
遺跡の北へ西方には、馬場山に連なる丘陵（通称向山）を眺め、南～東側は段丘状に標高を高めて丘陵麓部へ続く。遺跡から湖山池南岸までは直線で2.2km程である。馬場山から向山にかけての丘陵の西側一帯は、標高10m前後の平野部で肥沃な水田地帯として整備されている。この地域の平野部はかつて存在した吉岡湾ともいべき湾入部が、湖山池ラグーンの形成とともに、湖山川による沖積によってできあがったものであると考えられている。

おしなべて湖山池南部から東部へかけての平野部の形成は洪積世以降とされ、縄文海進・弥生海進を経て、弥生時代後半から古墳時代には、現在とほぼ同様の自然環境が展開し、農耕を主とした古代の生産基盤が形成されていたものと考えられている。湖山池周辺の平野部縁辺に人々が生活の場を求め、拡充していった足跡としての遺跡は、縄文時代にさかのぼる。青島・桂見・布勢（グラウンド）などの遺跡は、前・中期及び晩期の土器なども少量出土しているが、いずれも後期を主体としている。これらの遺跡は、千代川右岸の砂丘地のそれに対して「低湿地遺跡群」としてとらえられている。桂見遺跡では大量の木製品・種子類が出土している。また布勢遺跡では当時の生活・漁労・交易などのこの地域の縄文文化のゆたかさを示す木製品や漆製品が出土している。従来、西日本の縄文文化は東日本に比べて貧困であるとみなされがちであったが、これら「低湿地遺跡群」の発掘調査はその実相を再検討していく契機となるものであった。

弥生時代に入ると、鳥取平野の段丘や自然堤防・微高地上に生活の場が営まれている。近年まで湖山池周辺の弥生時代の集落については、具体的にはほとんど白紙の状態であったが、最近の周辺地域の開発に伴う事前調査の増大によって、住居跡などの遺構の検出の報告はかなりの数に達している。弥生時代前・中期の柱穴や前期を含む多量の弥生式土器が出土した岩吉遺跡をはじめ、中期以降の時期を主体とするつづら尾・青島・湖山第2・松原・布勢（グラウンド）・帆城・大楠遺跡などがみられる。このうち湖山第2遺跡からは弥生時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡25棟、帆城遺跡からは後期中葉に比定される竪穴住居跡1棟、布勢（グラウンド）遺跡では古墳時代を含めて8棟、その中の1棟からは管玉未製品・玉砥石が出土し玉作工房跡とされている。吉岡遺跡に近い松原遺跡からは、弥生時代後期前半の土器が出土している。これらの遺跡と関連をもつものとして、後期後半から古墳時代にかけて、泉を中心に展開した祭祀遺跡と考えられる塞ノ谷遺跡、高住の銅鐸（流水文偏平釵式）出土地がある。弥生時代後期末には、湖山池を一望する丘陵上に、突出部を含めて東西辺64～65m、高さ5mの最大規模の四隅突出型方形墓が築造されている。周辺地域の弥生時代墳墓の具体相も西桂見遺跡・桂見墳墓群における土壙墓群等の調査によって、その山陰的な特徴が明らかにされつつあり、今後の調査研究の進展が期待されている。

古墳時代になると、鳥取平野の生産基盤の拡充を背景として、湖山池周辺の丘陵上に大小様々の古墳が造営されるようになる。県東部で最大の橢間1号墳（全長92m）、布勢1号墳（59m）、大熊段1号墳（51m）、三浦1号墳（36m）、松原5号墳（33.5m）、松原7号墳（54m）、良田15号墳（36m）、高住1号墳（30m）、などの大・中規模の前方後円墳が点在し、円墳を主体とする小型墳は、湖山池南西～南東岸と北東先端部、野坂川左岸、右岸の丘陵地帯に数多くみられる。この地域の古墳の調査は、国体などの関連工事に伴ないここ数年の間に集中し、その結果として消滅した古墳が少なくないが、貴重な調査事例となっているものが多い。

その中で桂見2号墳（1983年調査、後消滅）は県下最大の方墳で、3基の埋葬施設が検出され、そのうち第1主体は7.5m×4.9mの墓壙に長さ4.3m、幅1mの水銀朱を施した長大な木棺が納め



- 凡例
- 古墳密集地
 - 古墳遺跡、他
 - ◐ 集落遺跡、主要古墳
 - ◑ 城跡
 - 高住12号墳
 - 高住銅鐸出土地
 - 高住つづら尾遺跡
 - 高住1号墳
 - 高住36号墳
 - 高住山ヶ鼻古墳
 - 帆城遺跡
 - 古海遺跡
 - 高浦廢寺遺跡
 - 大熊段1号墳
 - 山ヶ鼻古墳
 - 岩吉遺跡
 - 大梅遺跡
 - 青島遺跡
 - 西桂見遺跡
 - 桂見遺跡
 - 布勢クラウンド遺跡
 - 天神山遺跡
 - 湖山遺跡
 - 吉岡遺跡
 - 吉岡古墳群
 - 松原谷田遺跡
 - 塞ノ谷遺跡

第27図 吉岡遺跡周辺主要遺跡分布地図

られ、内部から後漢後期のものとみられる斜縁獣帯鏡、内行花文鏡、鉄刀、刀子、針状製品などの豊富な遺物が検出され、供献土師器類によれば前期中葉の築造と考えられている。前期後半から中期初頭にかけて築造されたものとして倉見古墳群（1981年調査）があり、また1984年（昭和59）には里仁古墳群（里仁32～35号墳）が調査され、中期の築造であることが確認されている。これらの古墳は、前述の大型前方後円墳の系譜とは別にその墳丘、埋葬形式等にこの地域に特徴的な様相をもった推移を見てとることができ、興味をもたれるところである。

千代川左岸において現在までに確認されている後期古墳の数は、右岸に比べると少ないが、1984年民間の研究団体によって調査された葦岡長者古墳は、両袖式の横穴式石室に箱式石棺を備えるもので、玄室内から須恵器、鉄刀・刀子・鉄鎌・馬具・釣針などが出土し6世紀後半の築造になることが推定されている。山ヶ鼻古墳は、有富川左岸の丘陵中腹に開口するくり抜き石棺式石室をもつ後期後半の特異な古墳である。高住12号墳や北村地内に所在する古墳は玄室コーナー部分に力石を設置し壁体を持ち送り気味に積み上げ天井石を架構する横穴式石室をもつものである。これと同様の石室を、今回の調査地南東側の丘陵麓部に2基（吉岡53号墳、妙徳寺1号墳）確認している。数は少ないものの、右岸の後期古墳には現在まで同様の構築方法による横穴式石室の報告はなく、左岸の横穴式石室の特徴となるものであろう。また、後期の墓制である横穴墓は、里仁、徳尾などに見られる。以上のような古墳群の造営は安定した内水面をもつ湖山池を中心とする漁撈、水上交易、周辺平野部での農耕生産の伸長を基盤としたものであり、有数の集落が営まれていたことは確かであろう。しかし、この地域での大規模な「ムラ」跡の調査事例はなく、その解明は十分ではない。一部に大橋遺跡、松原遺跡の調査事例があり、後者からは、古墳時代前期の竪穴式住居跡1棟の他、平安時代末期のものとする掘立柱建物跡が検出されている。

律令体制下にはこの地域は、先にも述べた通り、高草郡刑部郷に属するものと比定されているが、この時期の遺跡の発掘調査は十分に進んでおらず集落等の実体は不明である。しかし、湖山池東～南東岸地域が律令体制下における条里地域の開発の対象となっていたことは、『東大寺東南院文書』（高庭荘卷第三—承和9年<842年>など）の記録からも推定されているところである。条里遺跡復元の手がかりは多いとはいえないが、「高庭荘卷第三」には船負田・倉見田・葦原田・草尾田などの田名がみられ、それぞれ布勢・桂見・里仁等の地域に比定されている。高庭荘はすでに10世紀には、東大寺の政治的地位の低下や当該地や低湿地泥炭層であったための開発の困難性などによって没落していたものと考えられているが、いずれにしても条里地域整備には、この地域の有力な豪族の積極的なはたらきがあったと考えられ、前記古文献にも高草郡の国造勝盤の名もみられる。これらの律令体制下に消長していったこの地域の豪族の系譜を示唆するものとして、菖蒲廃寺が所在している。菖蒲廃寺の遺構は確認されていないが、塔心礎石とともに複弁8弁蓮華文軒丸瓦片の他に単弁8弁蓮華文の土師百井式軒丸瓦が出土している。また近傍に大野見宿禰命神社が所在し、土師氏との関連も注意される。

ちなみに、吉岡遺跡は、千代川左岸平野の菖蒲廃寺へは三山口、野坂を結ぶラインの延長上約8kmの地点にある。菖蒲廃寺から因幡国庁跡までは、その東方約5kmである。さらに吉岡遺跡より西へは、大畑、御熊をへて気高郡気高町上光まで約7km、上光より寺内廃寺までは鹿野をへて5kmの距離がある。古代駅制による古山陰道の道すじは、現在までに完全に明らかにされていないが、平安時代因幡四駅の一つ「敷見駅」^{しくみのうまや}が湖山池南岸付近に想定されていることから、吉岡遺跡付近が古代山陰道に沿った地点にあったと推定してもさしつかえないだろう。近辺には良田・高住・岩本・松原などの村落が見えるが、この付近は高草郡の郡域からみるとその東端近くになるが、天穂日命神社、天日名鳥命神社、阿太賀都健御熊神社などの式内社もみられ、この地域が古い歴史を秘めていることを示唆している。

15世紀に入って、湖山池東側に因幡守護山名氏によって布勢天神山城が築かれ、因幡支配の拠点となるに至って、この地域は再び歴史上にクローズアップされることになる。天神山城に関する古記録は比較的良好に残っており、『因幡民談記』（小泉友賢撰）、『因幡誌』（安部共庵撰）所収の古絵図には、当時の天守、堀割、寺社、町屋等の様子が描かれている。この時期の考古学的な発掘調査例としては、西桂見遺跡、桂見墳墓群から土葬墓、火葬墓が検出されている他、布勢第2遺跡からは池状遺構を伴う集落跡が調査されている。天神山城も部分的であるが調査が実施されている。

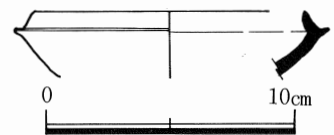
Ⅲ. 調査の概要

1. 遺跡の立地

吉岡遺跡は、湖山川上流湖山池南西岸より約2.2km程の地点に位置する。湖山川は毛無山(571m)に水源を發し、北東方向に流下し、妙徳寺付近で洞谷川と合流し、いったん湖山池に注ぎ、鳥取平野の西端を北東へ流下して千代川へ合流する総延長15kmの小河川である。毛無山より標高100～150mの山陵が北東方向へ延び、湖山池南～南東岸付近で継続して独立丘陵を形成している。湖山川と洞谷川が合流するあたりでは、山陵は標高60m前後の低丘陵となって半島状・離島状を呈して平野部へ突出する。

この付近は中世代白亜紀後期に形成された花崗岩が広く分布し、温泉が湧出している。花崗岩体に刻まれた湖山川、洞谷川の河谷にそって、火山砕せつ岩(河原火山岩層、白兔礫層)が流下し、上記丘陵の先端部(通称馬場山)はこの岩層で形成される。湖山池西岸の白メノウ、碧玉はこの層から産出している。馬場山から上流へは、一度標高を低めて通称向山と呼ばれる細長い丘陵に連なり、さらに一度標高を低めて麓部の平坦地に新町集落を擁する小丘陵に至るが、この丘陵の南西端は、洞谷川へ合流する湖山川によって分断されている。

(この地点は妙義橋西端の露頭でN68°E、62°Wの断層がみられる。) またこの新町集落裏手の丘陵尾根には5基(前方後円



第28図 尾山遺跡表採土器実測図

墳1、円墳2、方墳2)の古墳がみられるが、北東側半面の尾根はやせていて古墳は確認されていない。向山の丘陵尾根には連続的に31基の古墳(前方後円墳3、方墳5、円墳23)が密集し、馬場山にも16基の古墳(前方後円墳1、方墳6、円墳9)が所在する。遺跡(調査地)は、向山の北東側の展望台から一望することができる。

向山～馬場山の北西側は水田地帯としてひらけ、湖山川に沿って長柄集落があり、その上流の畑地には須恵器、土師器片が散見される。(第28図)この付近は通称尾山と呼ばれているが、天台宗の古い寺があったという言い伝えも聞かれる。その上流には明治時代終り頃まで瓦工場があったといわれる。地元の話では、瓦工場は、妙徳寺付近及びその下流の温泉街に近い場所にもあったそうであるが、後者の跡付近には陶枕などの窯道具の他窯壁残片、瓦片、陶器片などが散見される。

(写真1)

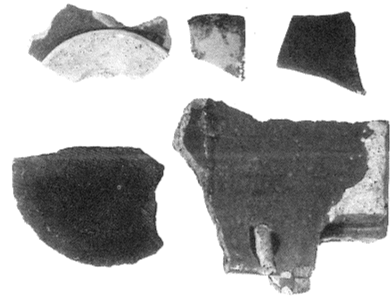
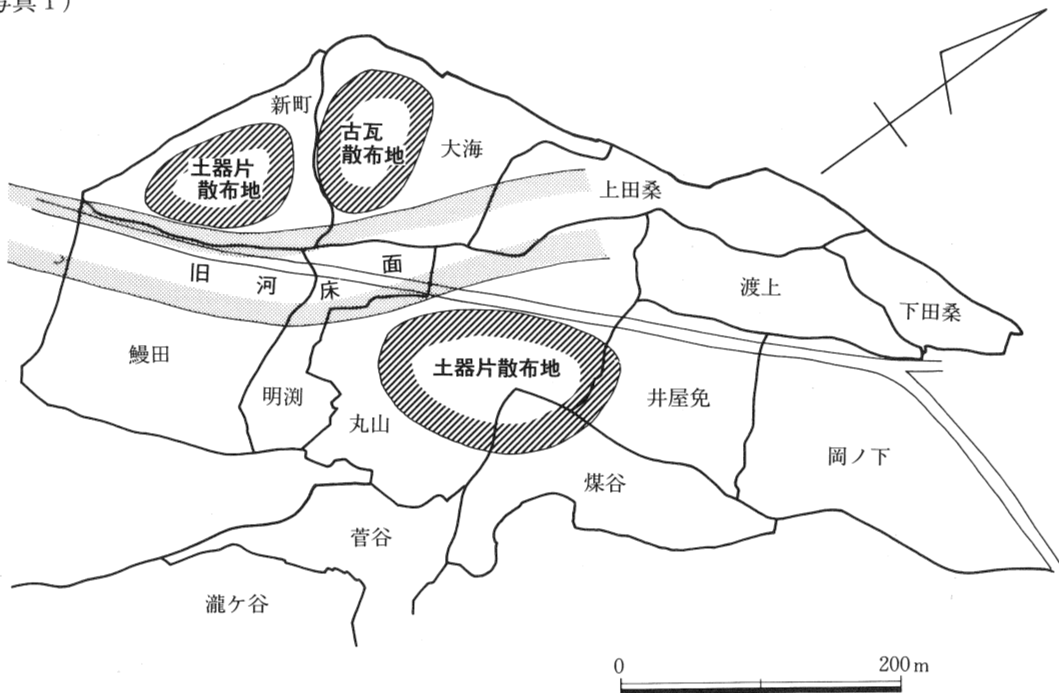


写真1 明治時代窯跡表採瓦、土器類



写真2 妙徳寺1号墳遠景(西から)



第29図 吉岡遺跡小字分布図


第2表 吉岡地区遺跡分布一覧表

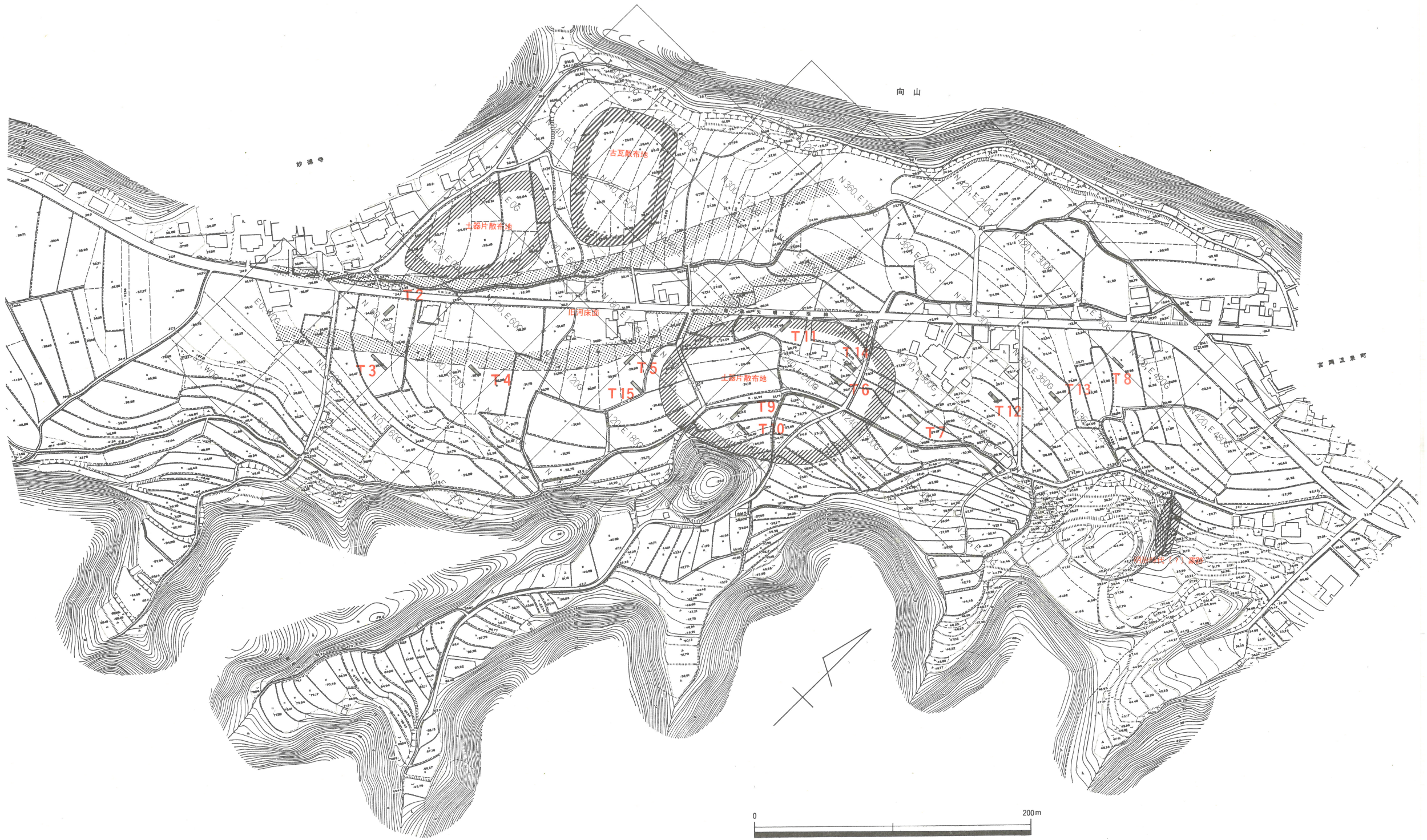
No.	古墳・遺跡名	種類	規模 直径×高さ	埋葬施設	出土遺物	備考
1	吉岡1号墳	古墳(円)	14(軸)×3(軸)	横穴式石室	須恵器、鉄刀、鉄鏃、鉄針	1983-84調査「葦岡長者古墳発掘調査報告書」
2	" 2号墳	" (方)	22.1×1.8			
3	" 3号墳	" (前方後円)	33.6×2.5			
4	" 4号墳	" (方)	20.5×1.3			
5	" 5号墳	"	11.2×0.8			
6	" 6号墳	"	11.9×0.8			
7	" 7号墳	"	11.2×0.8			
8	" 8号墳	"	18×1.3			
9	" 9号墳	" (円)	28.2×2.4			
10	" 10号墳	"	6×0.8			
11	" 11号墳	"	19×1.5			
12	" 12号墳	"	7×0.9			
13	" 13号墳	"	6×0.8			
14	" 14号墳	"	6×0.7			
15	" 15号墳	"	6×0.9			
16	" 16号墳	"	12×0.9			
17	" 17号墳	"	13×0.9			
18	" 18号墳	"	11×0.5			
19	" 19号墳	"	13×1.1			
20	" 20号墳	"	12×1.8			
21	" 21号墳	"	10.5×1.4			
22	" 22号墳	" (前方後円)	27.5×2			
23	" 23号墳	" (円)	11×1.9			
24	" 24号墳	" (方)	12×1.6			
25	" 25号墳	" (円)	22×2.2			墳頂部落ち込みあり
26	" 26号墳	"	19×0.8			
27	" 27号墳	"	9×0.6			
28	" 28号墳	"	6.5×0.4			
29	" 29号墳	"	6.5×0.5			
30	" 30号墳	" (方)	20×1.5			墳頂部落ち込みあり
31	" 31号墳	" (円)	9×0.8			
32	" 32号墳	"	12×1.8			
33	" 33号墳	"	12×1.6			
34	" 34号墳	"	12×2.4			墳頂部に溝状の落ち込みあり
35	" 35号墳	" (前方後円)	28.5×1.5			
36	" 36号墳	" (円)	15×1.5			古墳の可能性あり、公園により削平
37	" 37号墳	"	7×1.5			"
38	" 38号墳	" (方)	26×1.6			"
39	" 39号墳	" (前方後円)	43×2			"
40	" 40号墳	" (方)	7×0.6			"
41	" 41号墳	" (円)	20×1.5			"
42	" 42号墳	"	8.3×1.3			
43	" 43号墳	"	10.8×1.1			
44	" 44号墳	"	6.4×0.9			
45	" 45号墳	"	9×1.1			
46	" 46号墳	" (方)	18×1.9			
47	" 47号墳	" (円)	18×2			
48	" 48号墳	"	9×0.8			
49	" 49号墳	" (前方後円)	25.5×1.3			
50	" 50号墳	" (方)	12×1.4			
51	" 51号墳	"	12×2.5			
52	" 52号墳	" (円)	9.5×0.7			
53	" 53号墳	"	16.5×0.7	横穴式石室		石室露出、破壊、玄室奥壁の石材が残存
54	" 54号墳	"	11.5×0.9			
55	妙徳寺1号墳	"	20×3	横穴式石室		封土削平、一部天井石が崩れている
56	吉岡遺跡(大海地区)	遺物散布地			軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、須恵器、土師器	
57	" (丸山地区)	"			軒丸瓦、平瓦、鴟尾片、須恵器、土師器	
58	尾山遺跡	"			須恵器	
59	松原谷田遺跡	"			土師器、須恵器	竪穴住居跡、柱穴、溝(弥生~平安)
60	丸山城跡	城跡				

石材を抜き取られた横穴式石室（吉岡53号墳）が確認された。横穴式石室をもつことが判明している古墳は、先に述べた葦岡長者古墳の他には、妙徳寺集落の裏手丘陵裾部に1基（妙徳寺1号墳・写真2）を、今回の調査を機会に確認することができた。吉岡54号墳が所在する丘陵尾根の先端部の崖面は人為的に掘削された感を呈している。その裾部より、水田は段丘状を呈して張り出していて、この部分は、他の水田部に比べて、丘状に小高くなっていて、土器片が散布している（第26図1・2）。

湖山川は、妙徳寺付近で大きく流路を変えて洞谷川と合流していることは前に述べたが、この特徴的な地形は、湖山川のいわゆる「河川の争奪現象」に起因するものであることは、すでに周知のことである。詳細な説明をおこなうゆとりはないが、少なくとも遺跡の立地する微地形面の形成にかかわるものであることは否定できないだろう。このことは、今回の調査結果と矛盾するものではないといえる。すなわち当該地域の「河川の争奪現象」の過程にもとづけば、湖山川はかつて洞谷川とは独立した河川（古湖山川）であり、現在の遺跡所在地を貫流していたものと考えられるが、調査地低位部の水田におけるトレンチには旧河床面の存在を示唆する砂礫層が観察されている。また、県道北西側の基盤工事の掘削面にも、旧河床面を形成していたものと考えられる多量の河原石を含む砂礫層を確認している。その流路は多少の振幅はあるが、現在の水田用水路（小川）に重なっている（第31図アミ部分）ようである。Iで述べた古瓦片は砂礫層ないしはその上面にはほとんどなく、その北西側の新町集落に近いローム層から成る標高30m程の平坦地に集中して表採されている。また、この地点の南西側では耕作土下に弥生時代後期から古墳時代にかけての土器片が散布している。この平坦地は、前述したように水田となっているが、これより北東側へ向けて水田の標高は徐々にその度合いを強めながら低くなり、400m程下がると向山裾部の張り出しによってさえぎられる。この部分と古瓦散布地との比高差は約10mであり、古瓦散布地から県道を越えたところの吉岡53・54号墳の所在する尾根先端部までの距離は150m、比高差は5mである。また、今回の調査区域である県道南東側の水田地帯の南西端の標高は34.5mを測り、それより北東端までの距離は600m、前者との比高差は15mである。

2. トレンチ調査の経過と内容

前述したように古瓦片の出土が集中する地点では、当該遺物に関連すると考えられる基壇等の遺構は現在までのところ検出されていない。しかし、それは遺構が存在する可能性そのものを否定するものではない。従って、今回の調査地においてトレンチを設定するにあたっては、県道北西側の古瓦片の出土地域における廃寺伽藍等の想定される遺構の存在に留意し、吉岡地区は場整備事業平面図No.2（)をもとに全体をカバーする南北及び東西軸によって分割する60m方眼を設定した。その基点は、調査区域南西端に任意に置き、図に示すようにグリッド名称を付した。それを基準にして、須恵器片などの遺物散布地点を中心にして主幹となるトレンチ（3、4、5、6、7、8、9トレンチ）を設定し、発掘の過程で必要と考えられたトレンチを数本補足した。掘り下げの結果、



第31図 吉岡遺跡全体図（トレンチ配置図）

第6トレンチにおいて柱穴と考えられる掘り込み数ヶ所を確認したが、建物跡等の全体像を把握するまでには至らなかった。他のトレンチにおいては明確な遺構を確認することはできなかった。しかし、各トレンチ内の遺物出土状況によって、巨視的であるが、地下における遺物分布状況をとらえることができ、後述するように古瓦散布地域との関連において、古窯跡などの存在の可能性など遺跡の性格を推定する手がかりとなる知見を得ることができた。

以下各トレンチの掘り下げの結果について、要約的に述べる。(第1トレンチは欠番)

(1) **第2トレンチ** 調査区域の南西端の県道に近接した位置に設定したトレンチである。耕作土、床土の下は、北側半面では直ちに黒褐色粘質土層⑤に達するが、北側では黄褐色粘質土層③、淡褐色粘質土層④をへて⑤に達する。第6層は灰色の粘砂質土で、円礫がまばらに混入している。このトレンチの西側20mの県道を越えた地点で、重機掘削がなされていたが、そこでは1～2m前後の深さで多量の河原石と考えられる大小の円礫と砂礫が観察された。第2トレンチ内での出土遺物は奈良時代を主体とするごく少量の器種不明の土師器、須恵器、陶器細片のみで、②、③の土層に混入していた。遺構は検出されなかった。

(2) **第3トレンチ** 第2トレンチと並んで、調査区域の南西端に位置する。第2層(床土)は、東側で厚く、その下は第3層がみられず第4、5層の粘土層をへて暗褐色砂質土となっている。この土層変化は、以前の基盤整備工事(?)に起因するものと考えられる。遺物は、古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器、二段透かしの長脚高杯などの須恵器片が第2、3層より少量出土しているが、細片がほとんどである。遺構は検出されなかった。

(3) **第4トレンチ** 黒褐色粘土層③の下にこぶし大前後の円礫を含む砂層④があり、円礫は西側に密集している。③層及び④層上面に、奈良時代から中世にかけての土師器、須恵器(高台付杯など)、備前焼と考えられる中世陶器・白磁などの土器細片がごく少量検出された。他に土錘1が出土した。

(4) **第5トレンチ** 第3、第4トレンチから第5トレンチ、第11トレンチへかけて、標高は徐々に減じていくが、第10トレンチ付近の段丘状の張り出し部からみれば、第5トレンチはその西側裾部に位置している。第5トレンチ設定地点の標高は29.9mを測り、第10トレンチとの比高差は3.1mである。第2層床土の下は、③～⑪に分層される客土が認められたが、それより下層は砂利を含む均一な砂層となる。砂層上面でごく少量の土器片が検出された。いずれも細片で、奈良時代を主体とする土師器(甕)、須恵器(蓋など)である。一部に中世陶器片が混在する。北側で砂層に掘り込まれた数個の柱穴と考えられる小ピットが確認された。

(5) **第6トレンチ** 調査前の観察では、第9、10、11、14トレンチなどとともに土器片が散布していた地点に設定されたトレンチである。中でも、本トレンチ付近は、土器片散布が密である。第1、2、3層下に客土層④が認められ、その下に遺物包含層である黒灰色粘砂質土⑦が分層される。この第7層は微細な炭化物片を含み、全域で多量の土器片が出土した。時代は古墳時代後期から中

世にわたっているが、奈良時代の土師器類の破片がほとんどである。土師器には、甕が多くみられ、須恵器は高台付杯及び蓋が多くみられ、他に高杯、壺などが出土している。その中に、器種は不明（皿？）であるが、内外面赤彩の記号痕（原体不明）をもつ土師器片が検出されている。他に土錘1、正格子タタキ目の平瓦細片1が出土している。また、トレンチ西側で、柱穴と考えられる掘り込みが数個検出されたが、出土土器片との特定の相関関係をみいだしうる遺構としての性格は認知しえなかった。しかし遺物包含層下の第8層はスタッドな部分があり、時代は明らかでないが、当該時代の生活面であることを示唆している。排土中より水晶勾玉の破片1を検出した。

(6) **第7トレンチ** 第6トレンチのほぼ東側53mの位置に設定したトレンチである。第2層床土の下は、3層に分層される粘土層がみられる。須恵器片を主とする奈良時代から中世にかけての土器細片が出土している。遺構は検出できなかった。

(7) **第8トレンチ** 調査地区の北東端に設定したトレンチである。第2層床土の下は、乳灰色粘砂質土、淡灰色砂質土の堆積がみられ、褐色粘砂質土層⑤をへて、淡褐色粘土層⑥に達する、遺物、遺構ともに検出することができなかった。

(8) **第9トレンチ** 調査地区における土器散布地域の高所に設定した南北方向15mのトレンチで水田面標高は、32.6mである。地元の話によれば、本トレンチ付近に、十数年前頃まで、しめ縄を飾った大きな岩石があったそうであるが、現在では周辺にもそのような岩石は見あたらない。

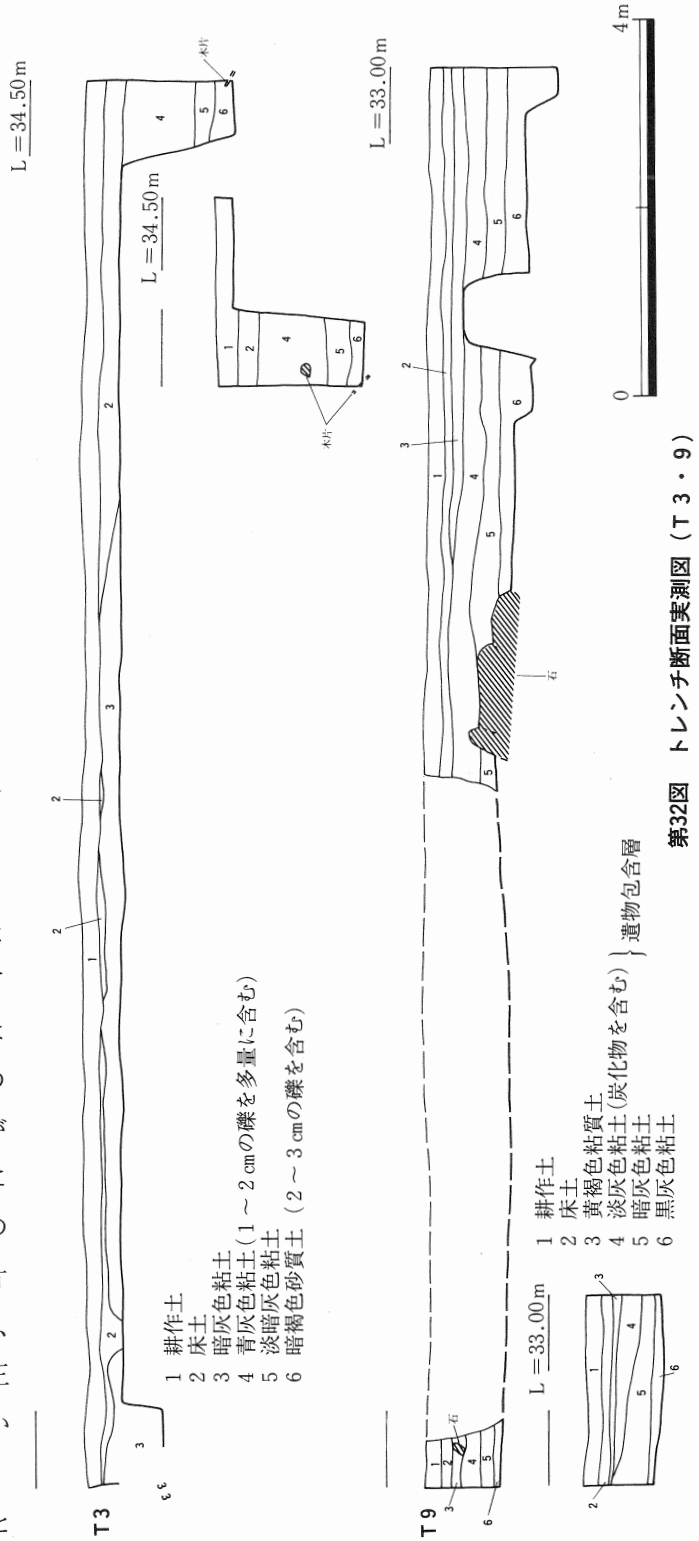
本トレンチは掘削途中で、暗渠からの溢水、また降雨など悪条件が重って、壁部の崩壊、床面の泥濘化をまねき十分な調査ができなかった。第2層床土下に客土と考えられる黄褐色粘質土層があり、さらにその下に炭化物微細片を多く含む淡灰色粘土層④及び暗灰色粘土層⑤の二層にわたる遺物包含層が存在する。遺物は第4層よりも第5層に多く出土している。その下の黒灰色粘土層⑥を掘り下げていくと、黒灰色砂質土に達する。出土した土器片の量は、第6トレンチについて多く、奈良時代に属するものも比較的多いが、中世にかかるものを主体としている。土師器は、甕、高杯の他器種不明のてづくね土器底部、須恵器は高台付杯、蓋の他壺等の比較的大きな破片が出土している。その他糸切底の土師質皿が数点検出されている。また、古備前系のスリバチ口縁部が出土した。中に弥生時代後期の甕片1が検出された。単弁12弁蓮華文軒丸瓦細片1が検出されていたが、他に鴟尾の縦帯部の内側の鱗状文の破片1が暗渠的部分の攪乱土中より出土した。トレンチのほぼ中央部の第3層中に人頭大前後の角礫、転石が発見されたが、遺構の存在を示唆するような意図的に配置された性格をうかがうことはできなかった。

(9) **第10トレンチ** 第9トレンチの東側に近接して設定したトレンチで、全トレンチ中もっとも最高所にあり、標高は33.1mである。東側で40cm程掘り下げて灰褐色粘土層⑥（地山）に達し、その上に土器片を包含する黒灰色粘質土層⑤が認められ、古墳時代から中世にいたる土師器、須恵器類の破片が比較的多く出土した。ほぼ完形の糸切底の土師質皿、縄目タタキの瓦細片1が出土している。他に裏面にヘラ状工具によると推定される×印の記号痕のある杯の蓋破片1が検出された。

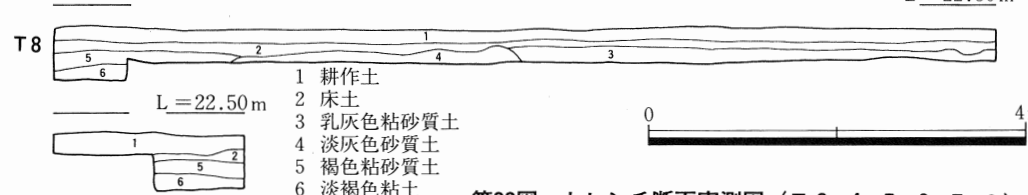
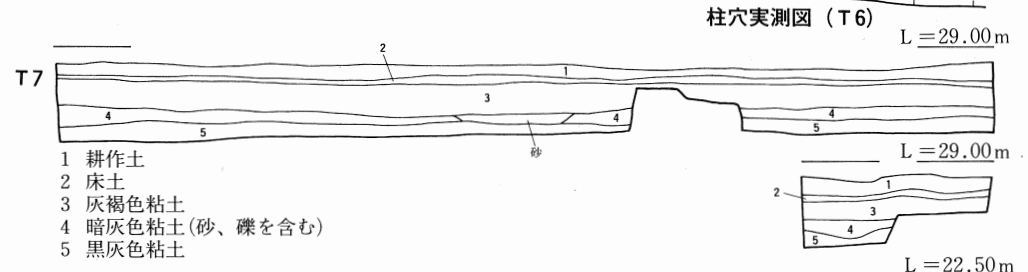
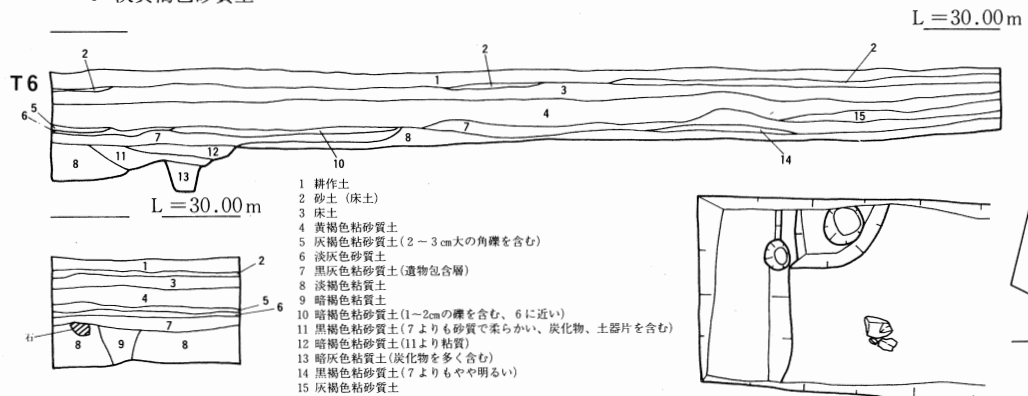
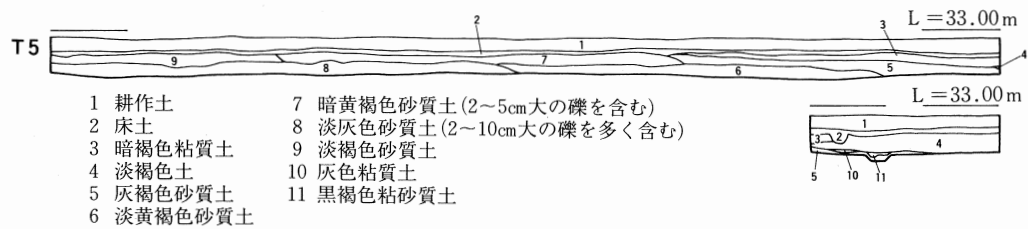
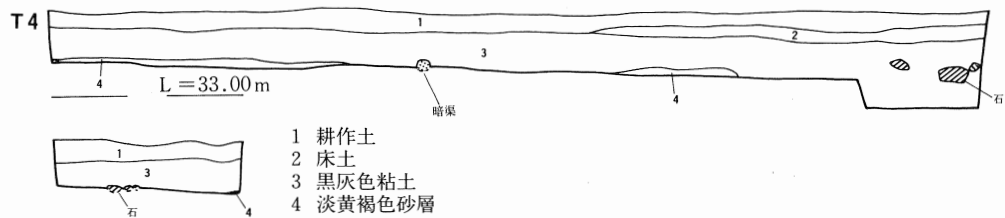
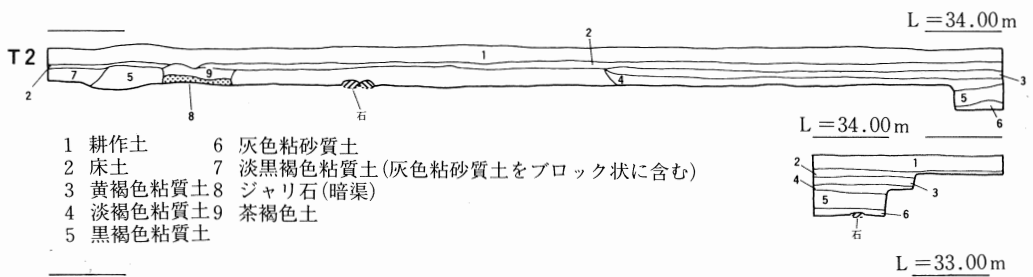
遺構は検出することができなかった。

(10) 第11トレンチ 調査区域のほぼ中央の段丘状の張り出し部の北西裾部に設定したトレンチである。南北方向10mのトレンチであるが、全トレンチ中土器出土量は最も多く、ほぼコンテナ1箱分である。土器片は古墳時代から中世にかけてのもので、奈良時代のものが大半以上を占める。土器を包含する層は第2層床土下第2、3、4、5、7層にわたっているが、第5、7層から出土量が多く、他の層からの出土は少ない。土器片の出土状況は錯綜しており、明確な遺構との相関関係、層位的な時間差を認めることはできなかった。第9層から6層にかけて浅い構状の凹凸を示す層位変化が観察された。これは何らかの遺構が存在したことを示唆するものであると考えられるが、平面的にプランを認知することは不可能であった。しかし第5、7層下に当該時代の生活面を想定することは可能であると考えられる。出土土器の器種についてみると土師器には甕類が多い。須恵器の杯蓋、壺、高杯の他には高台付杯が多く出土している。その中には、生焼けの未成品的な須恵器片がかなりあることが注目される。また、斜格子、縄目タタキの瓦細片各1、正格子目タタキ瓦細片2が出土している。

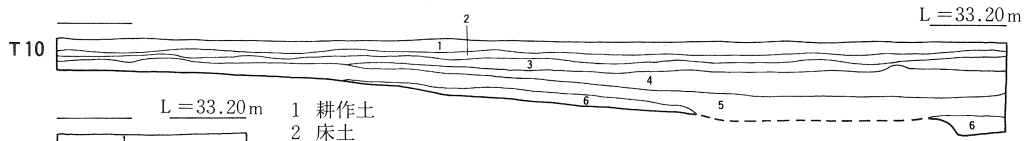
(11) 第12トレンチ 第7トレンチと第13トレンチの間に設定したトレンチ



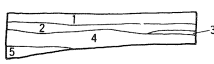
第32図 トレンチ断面実測図 (T3・9)



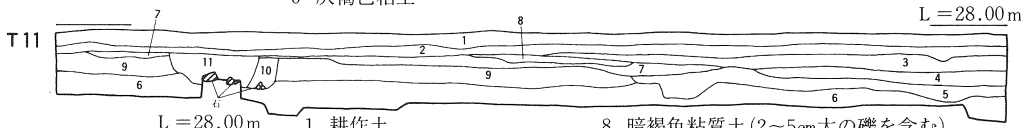
第33図 トレンチ断面実測図 (T2・4・5・6・7・8)



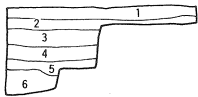
L = 33.20m



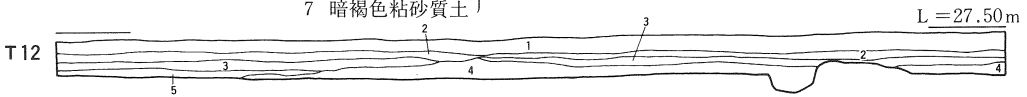
- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 灰褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土
- 5 黒灰色粘質土 (1 cm 前後の礫を含む、遺物包含層)
- 6 灰褐色粘土



L = 28.00m

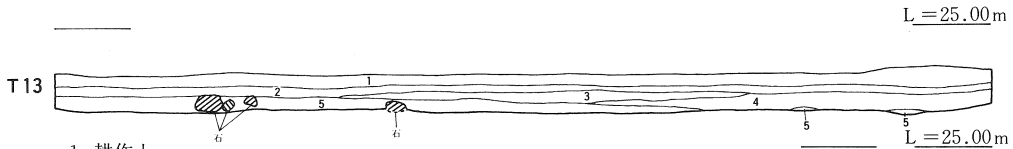
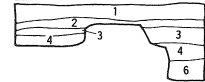


- 1 耕作土
 - 2 床土
 - 3 黄褐色粘質土
 - 4 灰色粘質土
 - 5 暗褐色粘質土
 - 6 淡褐色粘質土
 - 7 暗褐色粘砂質土
 - 8 暗褐色粘質土 (2~5cm 大の礫を含む)
 - 9 淡褐色粘質土 (2~5cm 大の礫を含む)
 - 10 暗灰色粘砂質土
 - 11 暗灰色粘砂質土 (10 よりやや明るい)
- 遺物包含層



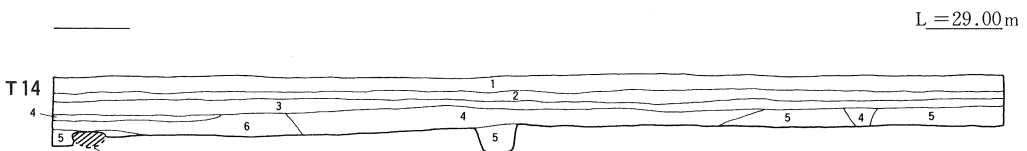
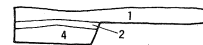
- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 暗黄褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗灰色粘砂質土
- 6 暗灰褐色粘質土

L = 27.50m

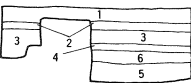


- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 暗褐色土
- 4 暗灰褐色粘質土
- 5 黄褐色砂質土 (2~3cm 前後の礫を多く含む)

L = 25.00m

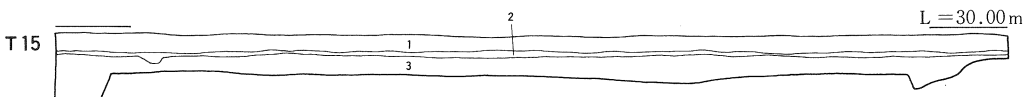


L = 29.00m

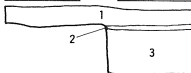


- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 暗黄褐色粘質土 (礫、遺物を含む)
- 5 淡褐色粘土
- 6 4 と 5 の混合土 (炭化物を含むややかたくしまっている)

L = 29.00m



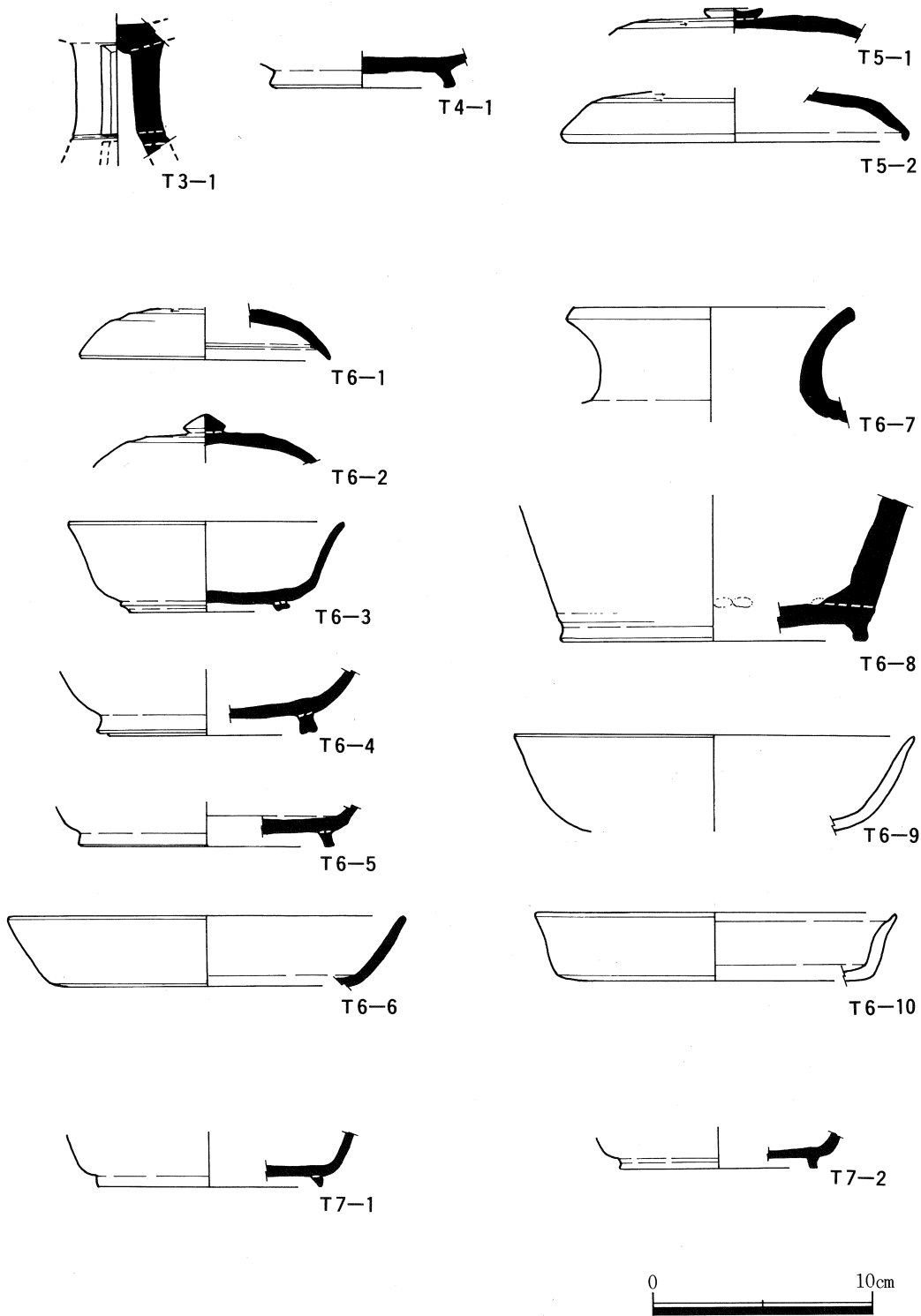
L = 30.00m



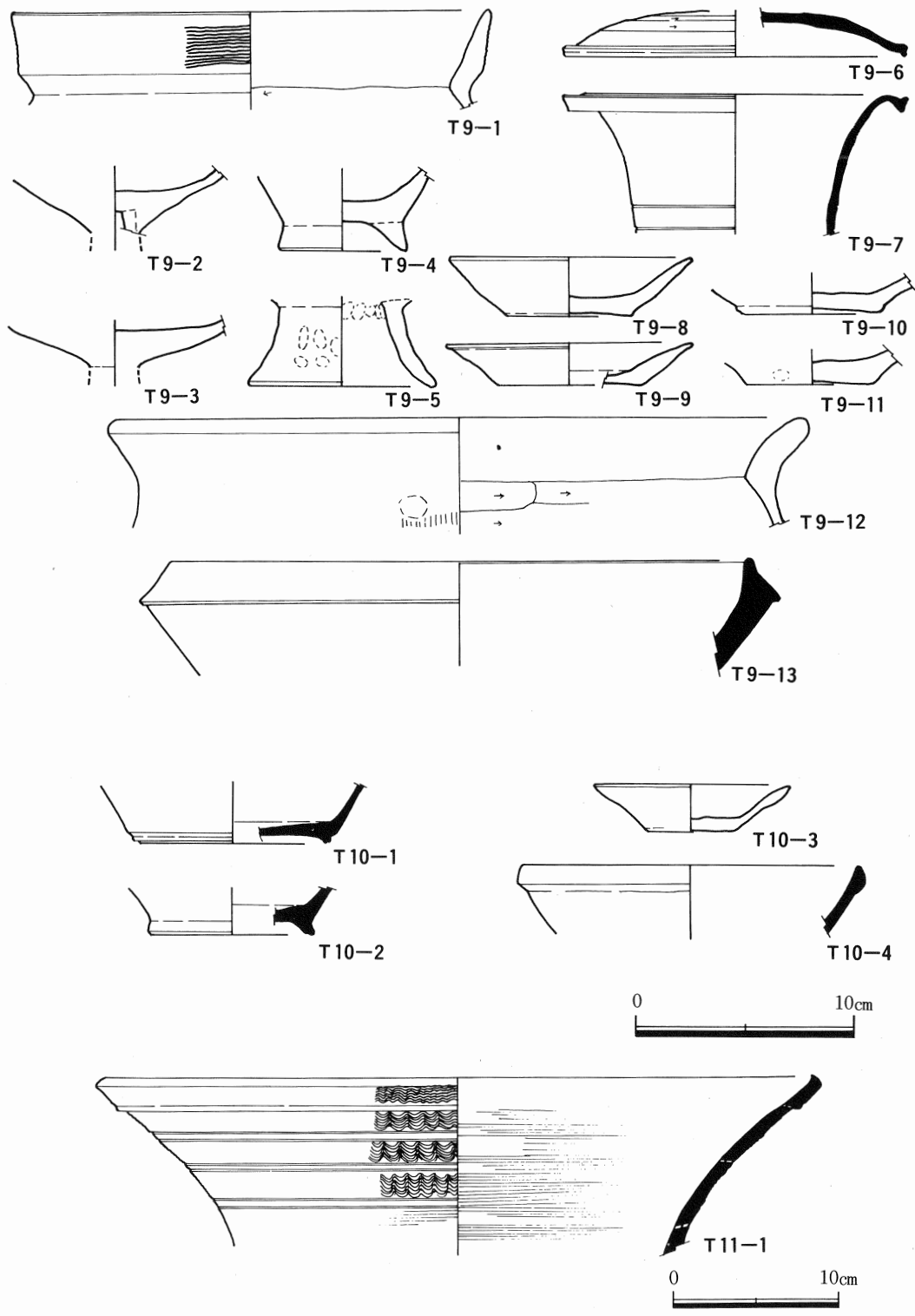
- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 黒褐色粘質土



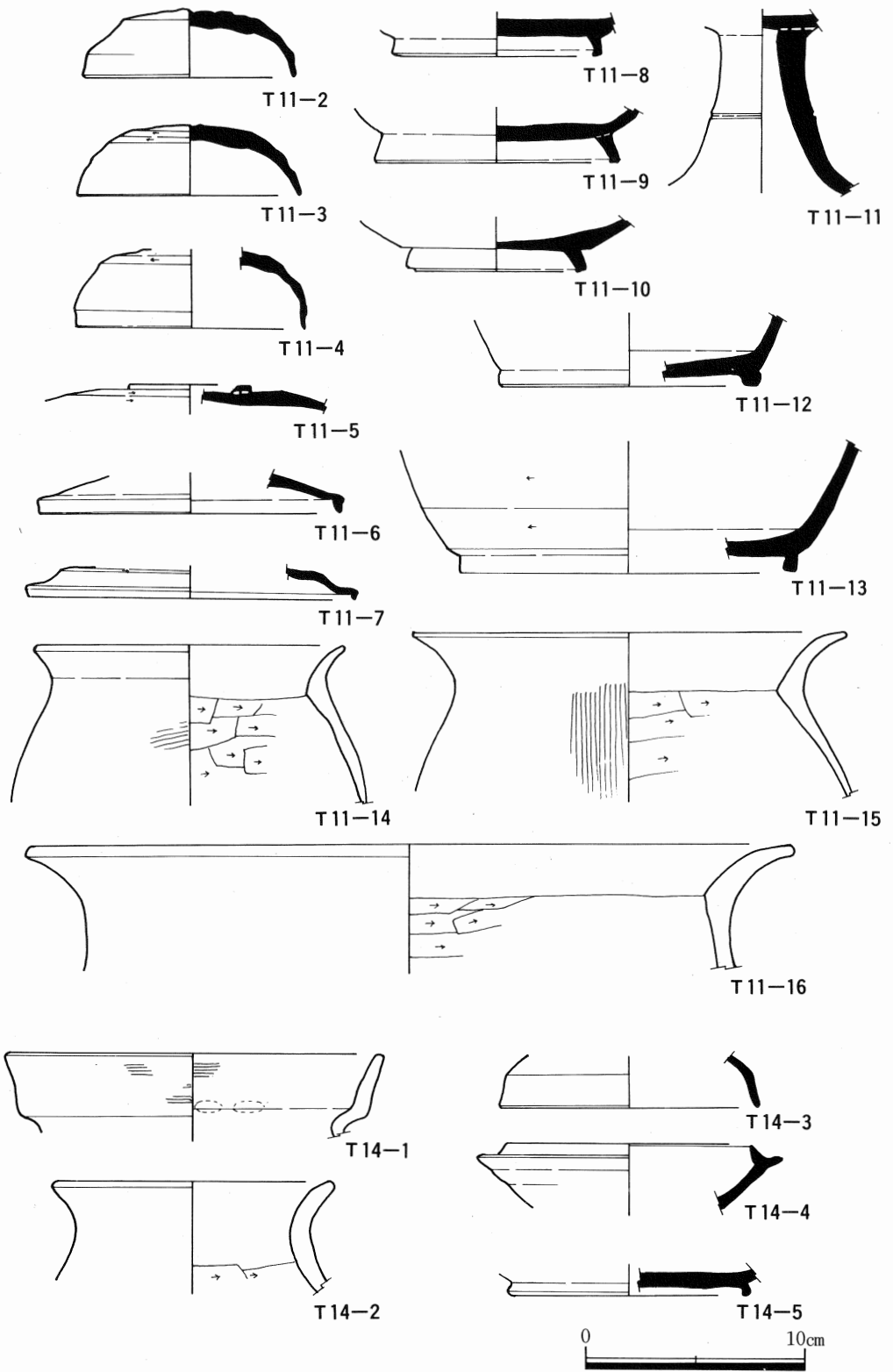
第34図 トレンチ断面実測図 (T10・11・12・13・14・15)



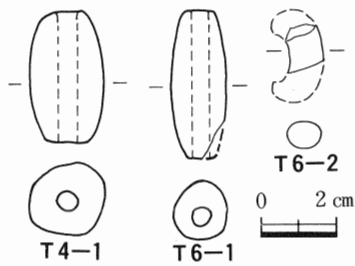
第35図 トレンチ出土土器実測図 (T 3・4・5・6・7)



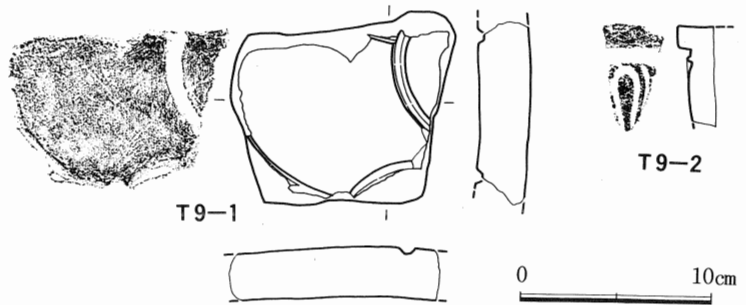
第36図 トレンチ出土土器実測図 (T 9・10・11)



第37図 トレンチ出土土器実測図 (T14)



第38図 トレンチ出土遺物実測図
(T4・6)



第39図 トレンチ出土瓦類拓影・実測図 (T9)

である。第3層から第4層にかけて粘質土層が認められ、暗灰色シルト層⑤をへて、第6層の暗灰褐色砂質土に至る。

遺物は、第4、5層より古墳時代から奈良時代にかけての土器片がごく少量出土したにとどまる。遺構は検出できなかった。

(12) 第13トレンチ 調査区域の北東端の第8トレンチのほぼ南50mの位置に設定したトレンチである。土層は、第12トレンチの層序に準じる。近世の陶器片2点のみの出土にとどまる。遺構は認知できなかった。

(13) 第14トレンチ 第6トレンチの北側に、第6トレンチのサブトレンチとして設定した。第2層下、第3、4層に遺物の包含を認めた。第5層は均一なきめのこまかい淡褐色粘土層で、東側では暗灰色を呈しつつ、円礫が混入する。第6層は、やや固く締まって第4及び5層との混合土で炭化物微細片を多く含んでいる。断面にピット状の掘り込みを2ヶ所認めた。遺構は性格は明らかにできなかったが、第3、4層下に時期は不明であるが当該時代の生活面が想定されるだろう。出土遺物は、須恵器片を主として、弥生後期末の土器片1を含み、中世に至るまでの土器片がみられるが、主体は奈良時代である。

(14) 第15トレンチ 第5トレンチの柱穴状掘り込みの面的なひろがりを確認するために第5トレンチのサブトレンチとして設定した。第2層床土下は黒褐色粘質土層でピット等の掘り込みは全く検出されなかった。古墳時代から中・近世にかけての土器片がごく少量出土した。

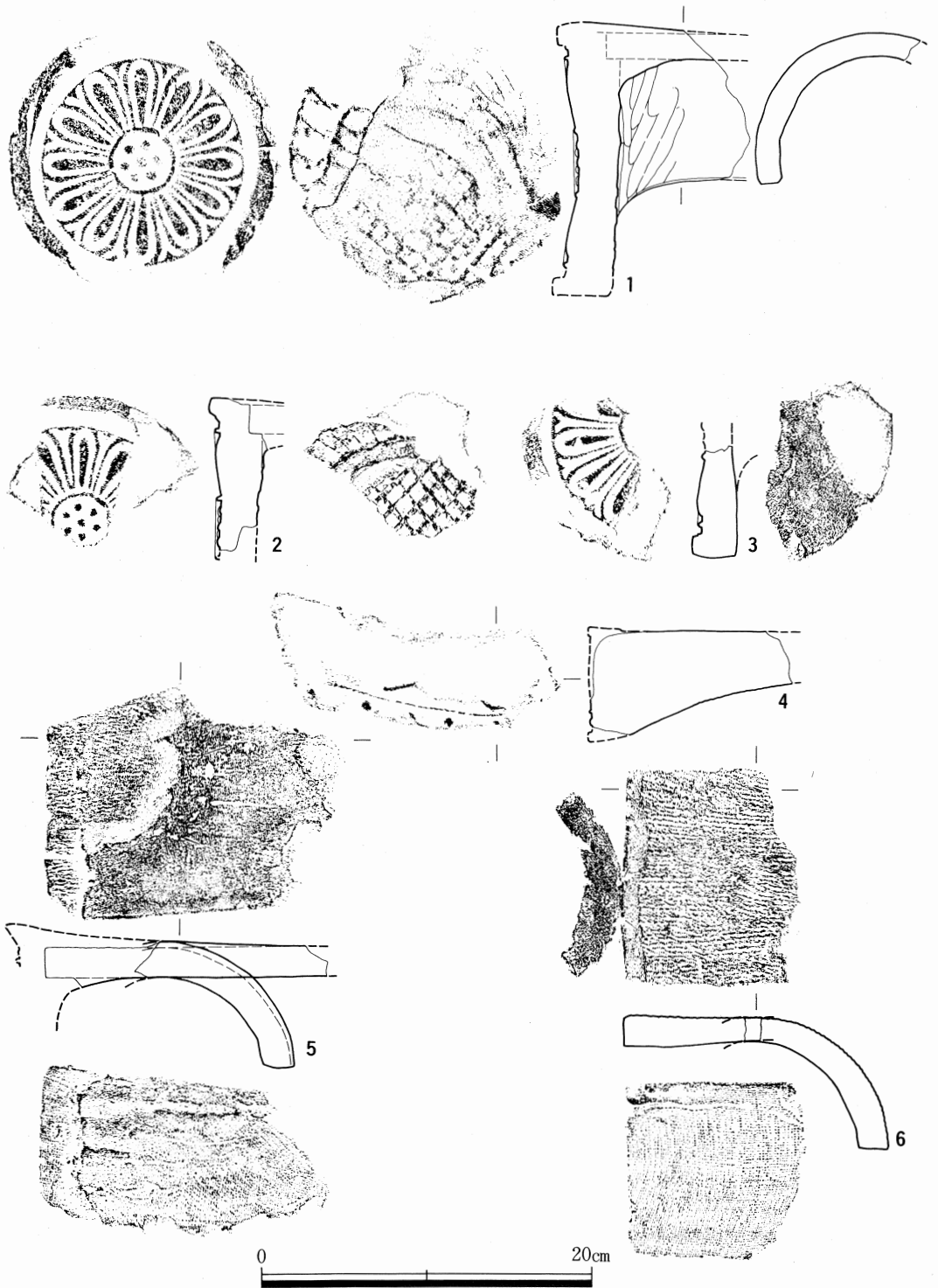
3. 字大海出土の遺物

県道矢矯松原線の西側にあたる昭和61年度は場整備事業区域内の字大海、字新町を中心に、比較的多くの瓦類、土器類が工事によって出土している。これら表面採取によって得られた遺物は、整理用コンテナ5箱分程度である。多くは細片となった丸瓦、平瓦の類であるが、5点の瓦当面の遺存する軒丸瓦、軒平瓦が含まれている。ここでは瓦類を中心に概略を記しておきたい。

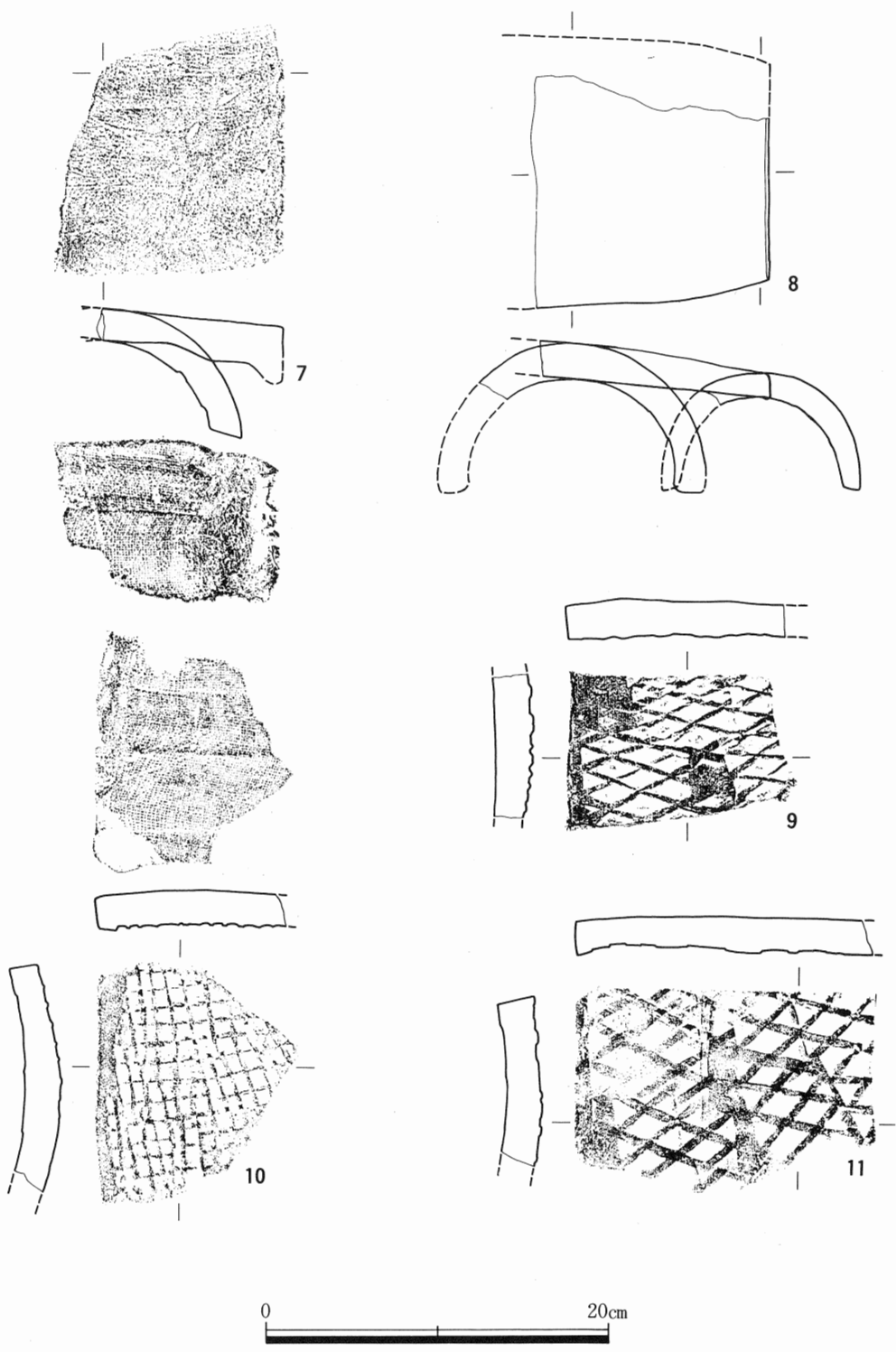
1) 瓦類

瓦類は、字大海を中心に採取されている。軒丸瓦2種、軒平瓦1種が認められる。

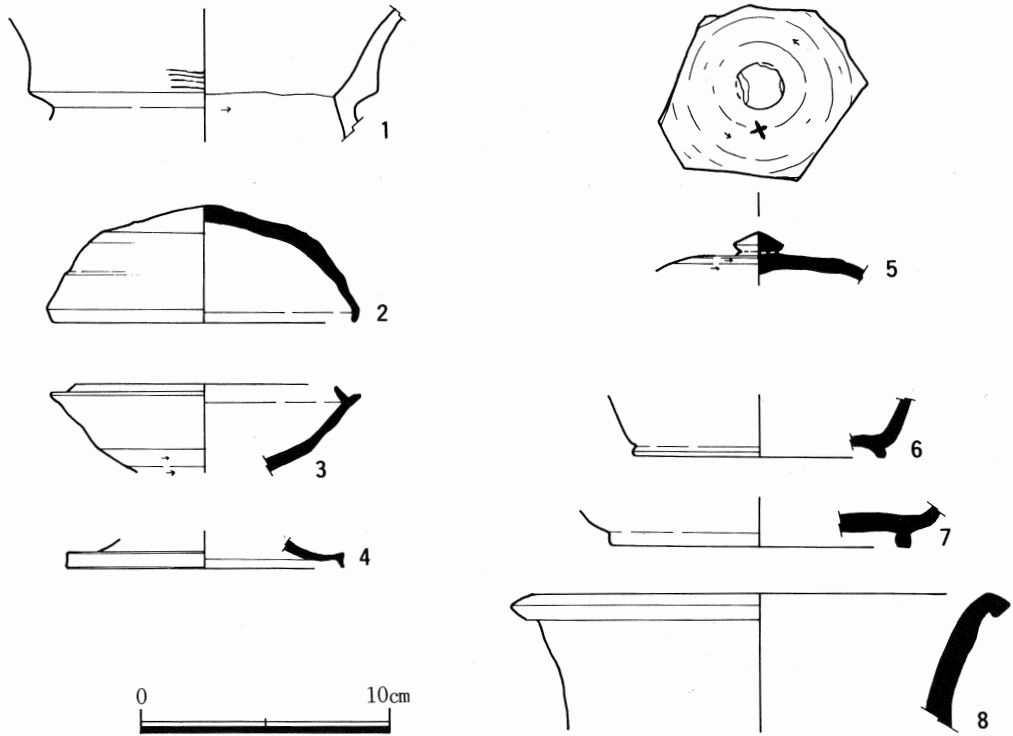
軒丸瓦 単弁12弁蓮華文瓦(第40図1～3)の花弁は、いずれも薄肉で細長く、中に中肉の子葉を



第40図 字大海出土瓦拓影・実測図(1)



第41図 字大海出土瓦拓影・実測図(2)



第42図 字大海出土土器実測図

置くものである。間弁は、三角形ないし楔形を呈して中房まで達することはない。細い圈線をめぐらした小さな中房には、1 + 6の蓮子が配される。やや高い周縁は、素文の直立縁である。丸瓦の接合は、いわゆる印籠つぎで、第40図1、2に良くその痕跡を観察することができる。また、1、2の瓦当裏面には正格子目のタタキ痕が残っており、造瓦技法の大きな特徴といえる。1は褐色、2、3は灰色を呈し須恵質であるが、いずれも砂粒を多く含む。1の瓦当径は16cm、2、3の瓦当推定径はそれぞれ15.4cm、16cmを測る。字丸山の第9トレンチから発掘調査によって出土した軒丸瓦片も同様のものである。

複弁を呈すると考えられる蓮華文軒丸瓦(図版18)は、細片でかつ磨耗が激しいため図示できなかったが、花卉の外側には連珠文がかすかに観察される。外区に連珠文をめぐらし、周縁を鋸歯文で飾る類のものと推測される。

軒平瓦 軒平瓦は、1点だけ認められた。無顎形式であるが、瓦当面は欠損部分が多く詳細については不明である。外区下帯に連珠文を配するもので、内区の唐草文の一部が遺存する。

丸瓦 行基葺の無段式のものばかりで玉縁の付いたものは見られない。内面には細かい布目痕があり、外面は縄目タタキとすり消したものの2種が認められる。

平瓦 丸瓦と同様細片が多く、大きさ等詳細は不明である。外面は、いずれも布目痕が残り、桶の枠板の痕跡を残したのものも見られる。内面(凸面)のタタキには、格子目・縄目が認められる。

このうち格子目は、正格子、斜格子があり、また大きさによってもいくつかの種類に分類することができる。側端面は、いずれもヘラ削りされており、平瓦は4枚づくりによったものと思われる。

2) 土器類

土器類は、字新町を中心に散布しており、弥生式土器、土師式土器、須恵器が見られる。第42図1は、弥生時代後期後半の甕で表採資料の中ではもっとも古いものである。須恵器にはやや時期的な幅が認められ、古墳時代後期から奈良時代にかけての所産になるものと考えられる。第42図5のつまみの付く蓋は、外面に漆状の顔料で×印が付けられており、注意される。土師器には、高杯、甕などの器種が認められる。

Ⅲ まとめ

1. トレンチ調査

今回のトレンチによる調査の結果、出土遺物との相関関係が明白であり、かつその性格が明らかな遺構を検出することはできなかった。しかし、調査区域の地下における遺物の分布や種類など、ある程度、遺跡の性格を判断することができる知見を得ることができた。以下若干の検討を加え、現段階で類推される字丸山を中心とする調査区域の性格の一端についてふれておきたい。

最初に、各トレンチの掘り下げによる調査結果について要点を概略的に述べる。

〈1〉 第2・4・5トレンチにおいては、古湖山川の旧可床と考えられる層が認められた。

第3・7・8・12・13・15トレンチには、南側の丘陵谷筋から押し出され堆積した粘質土ないしは粘土層が観察される。これらはⅢ-1で述べた本遺跡の微地形の形成過程を裏づけるものと考えられる。

〈2〉 遺物の出土状況について見ると第6・9・11トレンチには顕著な遺物包含層が認められ、多量の土器片が出土した。土器片の出土量が多いトレンチは、地表における土器片散布地域のトレンチであり、他のトレンチからの土器片の出土は、ごく少量であり、特に北西側の第8トレンチでは全く出土していない。ほとんど、奈良時代から中世の所産と考えられる土器である。第9・10トレンチに中世のものが比較的多く混在する以外はいずれも奈良時代が主体である。中には古墳時代後期にさかのぼるものが散見され、ごく少量の弥生土器が出土している。土器片の出土状況は錯綜しており、明確な遺構との相関関係は認められず層位的な時間差も認められなかった。出土遺物の中には、第6・9・11トレンチからの正・斜格子目、縄目のタタキを持つ瓦片、及び第9トレンチからの単弁12弁蓮華文軒丸瓦片、鴟尾片の出土、また、第6及び特に第11トレンチにおける生焼けの須恵器の出土が注意される。その他器種は、祭祀的要素の強いもの、日用的なもの多岐にわたっている。

〈3〉 遺構としては、第6トレンチの柱穴、第15トレンチの柱穴状の掘り込みが検出されたが、いずれも明確な遺構のプラン、遺物との相関関係を確認するまでには至らなかった。

第3表 調査トレンチ一覧表

トレンチ 番号	位 置			大 き さ (長さ×幅) (主軸) _(m)	遺 構	出 土 遺 物	備 考
	グリッド	標高 (m)	地 番				
T 2	N 60 E 0 G	33.8	吉岡温泉町 字鰻田 568-1	10×2 (N-S)		ごく少量の土師器、須恵 器片	
T 3	N 0 E 0 G	33.9	” 字鰻田 567-1	15×2 (E-W)		少量の土師器、須恵器片	
T 4	N 60 E 60 G	32.5	” 字鰻田 561-1	10×2 (E-W)		土師器、須恵器片 ごく少量の中世陶器、白 磁片	
T 5	N 120 E 120 G	29.9	” 字丸山 538-1	10×2 (N-S)	柱 穴 (?)	ごく少量の土師器、須恵 器及び中世陶器片	
T 6	N 240 E 240 G	29.6	” 字丸山 547-5	10×2 (E-W)	柱 穴	多量の土師器、須恵器片 少量の中世陶器片 正格子目タタキ平瓦片 1 水晶製勾玉破片 1	
T 7	N 240 E 300 G	28.8	” 字井屋免 494-1	10×2 (E-W)		少量の土師器、須恵器及 び中世陶器片	
T 8	N 420 E 420 G	22.3	” 字岡ノ下 484-3	10×2 (E-W)		出土遺物なし	
T 9	N 180 E 240 G	32.6	” 字丸山 543	15×2 (N-S)		多量の土師器、須恵器及 び中世陶器片 弥生時代後期甕片 1 単弁12弁軒丸瓦片 1 鷗尾片 1	調査中崩壊
T 10	N 180 E 240 G	33.0	” 字丸山 543	10×2 (E-W)		比較的多量の土師器、須 恵器及び中世陶器片 縄目タタキ平瓦片 1 ×印記号痕付杯蓋片 1	
T 11	N 240 E 240 G	27.9	” 字丸山 547-6	10×2 (N-S)		多量の土師器、須恵器片 少量の中世陶器片 正格子目タタキ平瓦片 2 斜格子目タタキ平瓦片 1 縄目タタキ平瓦片 1	生焼けの未成 品様須恵器片 出土
T 12	N 300 E 360 G	27.4	” 字井屋免 490	10×2 (E-W)		ごく少量の土師器、須恵 器片	
T 13	N 360 E 360 G	24.5	” 字岡ノ下 488-1	10×2 (E-W)		ごく少量の近世陶器片	
T 14	N 240 E 240 G	28.5	” 字丸山 545-1	10×2 (E-W)		土師器、須恵器、中世陶 器片 弥生時代後期甕片 1	
T 15	N 120 E 180 G	29.9	” 字丸山 538-1	10×2 (E-W)		ごく少量の土師器、須恵 器及び中・近世陶器片	

〈4〉 土器片の出土が集中しているのは、段丘状の高所平坦地からその裾部に限定される。それらはこの高所を中心とする地点に関連する遺物である可能性が高い。しかしトレンチ内の層序と土器片の出土状況は、この地点が洪水等の自然的な要因による土砂流失、堆積等の変化あるいは後世の人為的な改変による地形の変化が相当進行し、遺構もそれにともなって流失、損壊している可能性が高いことを示唆している。

以上、概略的に述べたが、先ず、第6・9・11トレンチからの古瓦片、第9トレンチからの鴟尾片の出土が注目される。いずれの瓦も遺構にともなうものではないが、第9トレンチの軒丸瓦片は字大海で表採されたものと同型式であり、他の瓦片も時代的に併行している。しかし、調査区域における瓦や鴟尾の出土地点付近は、瓦葺の寺院、官衙等の建物の建立には、地形的に狭小で不安定であり、トレンチにもそれらの建物を示唆する遺構は発見されなかった。古瓦、鴟尾片は、試掘調査区域北西側の瓦表採地点、すなわち想定される廃寺跡から、人為的に運ばれてきた可能性も否定することはできないが、出土地点との関連を無視することも早急であろう。一方、土器類の出土状況を見ると、器種はかなりバラエティーにとんでおり、日用的なものとともに祭祀的な用途のものも多い。しかし、古墳、あるいは特定の祭祀遺跡に伴うものであるともみなしがたい。以上の事実と〈2〉～〈4〉で述べた全般的な土器の出土状態、範囲等、特に第11トレンチの生焼けの未成品ともいうべき須恵器類の出土などを考え合せると、ここでは、奈良時代を中心にいとまれた窯址の存在の可能性を指摘しておきたい。先に述べたトレンチ内における瓦類の出土は、この視点からとらえたとしても大きく齟齬をきたさないものと考えられる。土器類の出土が集中する地点は、地形的な改変が進行しているが、奈良時代を中心とする窯業施設の設営が不可能であると考えられず、むしろ、地形的には適地といってよいだろう。明確な遺構の検出をみない現段階では、これらの判断も類推の域をでないといえるが、字大海に存在したと考えられる寺院に用いられた瓦等を今回の調査によって想定される窯址に求めることを全面的に否定する根拠もないと思われる。また、Ⅲ-1でふれた近辺の明治時代の瓦窯址の存在も、この地域が良質の粘土を産することを示しており、上記の指摘の背景として考えることもできよう。

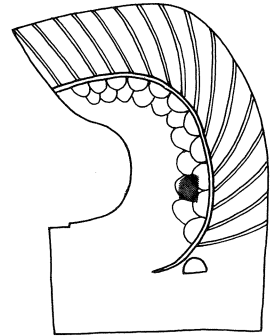
2. 吉岡大海廃寺址

吉岡温泉町字^{ダイカイ}大海から出土した古瓦の概略については、すでに述べた。ここでは、古瓦出土地の性格と出土した瓦の持つ意義について簡単に触れることとしたい。

これまで、古瓦の出土する遺跡としては、客土層からの出土など特殊な例外を除けば、生産址たる瓦窯址、消費地である寺院、官衙建物址が知られている。しかし、その多くは寺院址である。県道西側の字大海を中心とする瓦出土地は、ゆるやかに南西から北東へと傾斜し、広さは南北100m、東西80m程の広さがある。調査前に実施した盛土を除去しての土層観察や工事による切削面の観察からは、旧河川と考えられる河道の西側はローム層の安定した地盤が認められた。なお、付け加えれば、ほ場整備事業による損傷は、壊滅的なものではなさそうで旧地形はかなり遺存している可能

性は高い。

さて、出土した瓦類の多くは小片であるが、瓦窯址出土瓦にみられる変形した瓦片は認められず、また、出土瓦は単弁、複弁両型式が認められるなど消費地の様相を示す。基壇、礎石など建造物の存在を示す遺構や寺院を示す遺構などが確認されていない現在、躊躇する面もない訳ではないが、ここでは、以上の観点から奈良時代初頭を前後する時期に寺院の存在した蓋然性は高いものと考えておきたい。この想定を補強するものとして、高草郡刑部郷に比定されて



いるこの地には、時代は下るが因幡一の神階を授与された天穂日命神社、同じく式内社天日名鳥命神社、阿太賀都健御熊神社の三社があり、また、古代山陰道の存在などがある。なお、以後の無用の混乱を避ける意味もあり、字大海の古瓦出土地を吉岡大海廃寺址と仮称しておきたい。

第43図 T 9 出土鴟尾片部位模式図
(国府町玉鉾等ケ坪廃寺出土鴟尾より作成)

出土した単弁12弁の軒丸瓦は、鳥取県東部の地域色とも考えられる瓦当文様で、同種のもものが隣接した気高郡内に認められている。気高町上原遺跡、上原南遺跡、鹿野町寺内廃寺で知られており、寺内廃寺出土軒丸軒の分類ではⅠ類Cにあたるものである。複弁形式と考えられる軒丸瓦は、同廃寺のⅡ類とされるもので、土師百井式として設定されている単弁8弁連華文瓦を出土している鳥取市菖蒲廃寺でも認められている。

また、第9トレンチで出土した鴟尾は、小片ではあるが良くその特徴をあらわしている。破片は、第43図に示した部分に相当するものと考えられ、縦帯の内側に沿って沈線で鱗状の文様を表現したものである。鱗状文様から全高を復元すると約1.5m程度となる。このような沈線によって文様をあらわす鴟尾は、鳥取、島根両県下に見られる地域色の濃いものといわれている。本例は、国府町玉鉾廃寺、東郷町野方弥陀ケ坪廃寺例に近いものと考えられる。

これら瓦類の示す編年的な位置は、奈良時代初頭を前後するものと考えられる。地方寺院造営開始時期は、7世紀後半から8世紀初頭に集中するといわれているが、字大海に所在したと想定される寺院もほぼその時期に当たるものと思われる。本寺院もまた、当時の中央からの仏教奨励政策を契機として、高草郡内の地方豪族によって造営されたものと考えられる。しかし、先に見た瓦当文様の共有関係など複雑な様相を持っていることにも留意しておきたい。

今回は、寺院造営の契機、性格、造営集団(者)、瓦当文様の共有関係と、このことによって示される各造営集団(者)との関係性など深く触れることができなかった。また、このことと瓦類に見られる地域色の濃い様相をどのようにとらえ、関係づけていくのか、問題は多岐にわたる。これらの問題については、今後の究明に待ちたい。

今回の吉岡遺跡の発掘調査は、ほ場整備事業による工事中に遺物が発見されたことに端を発した

ものであった。しかし、地元の皆さんのご理解とご協力を得ることができ、また、関係各機関及び関係者各位のご支援によって所期の目的を果すことができた。最後になったがご芳名を記して感謝の気持としたい。

土地所有者 村上光治、白岩武士、澤田俊恵、白岩多喜男、護田浩二、那和一郎、那和正志、佐々木実太郎、豆田しげ、佐々木光男、柳田敏博、那和二郎

指導・協力 文化庁、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、鳥取市農協吉岡支所、鳥取市農林水産部耕地課、鳥取市立湖南中学校、湖南地区公民館、明日の湖南を考える会、白岩庄市、木村禮三郎、表務、加藤和徳、亀井熙人、三谷巍、真田廣幸、田中弘道、田中精夫、野田久男、絹見安明、亀井泰三、坂林勝太郎、林義昭、湯本一男、小林精、山本富美子、井上勝江、木下満子、那和絹子、山川正蔵、山川佳代子、山岡徳人、山田真宏、岩垣伸治、前田均、奥田繁太郎、谷口忠章、安富尚、杉谷美恵子、平勢隆郎、治部田史郎

(敬称略・順不同)

主な参考文献

奈良国立文化財研究所『日本古代の鴟尾』 飛鳥資料館 1980年

奈良国立博物館『縮刷版飛鳥白鳳の古瓦』 東京美術 1982年

倉吉博物館『山陰の古瓦』 1975年

川上貞夫『岡益の石堂』 矢谷印刷所 1966年

湖南連合青年団『湖南誌』 1973年

鳥取大学歴史学研究会『千代川』 4号 1967年

鳥取県『鳥取県史』 1 1972年

鳥取県『鳥取県史』 2 1972年

明日の湖南を考える会『葦岡長者古墳発掘調査報告書』 1984年

鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書』 第1集 1960年

鳥取県教育委員会『改訂鳥取県遺跡地図』 第1分冊 1973年

鹿野町教育委員会『寺内廃寺発掘調査概報』 Ⅲ 1981年

郡家町教育委員会『土師百井廃寺跡発掘調査報告書』 I 1979年

郡家町教育委員会『土師百井廃寺跡発掘調査報告書』 II 1980年

気高町教育委員会『気高町文化財報告書』 Ⅲ-1 1979年

気高町教育委員会『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書』 1986年

鳥取県教育委員会『菖蒲廃寺発掘調査概報』 1968年

真田廣幸「奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相」『考古学雑誌』 第66巻第2号 1980年

真田廣幸「伯耆大御堂廃寺考」『山陰考古学の諸問題』 1986年

星見清晴・足立智海・福本幹久「湖山川（通称長柄川）に見られる河川争奪の一考察」『鳥取県野外学習テキスト』鳥取県教育研修センター 1981年

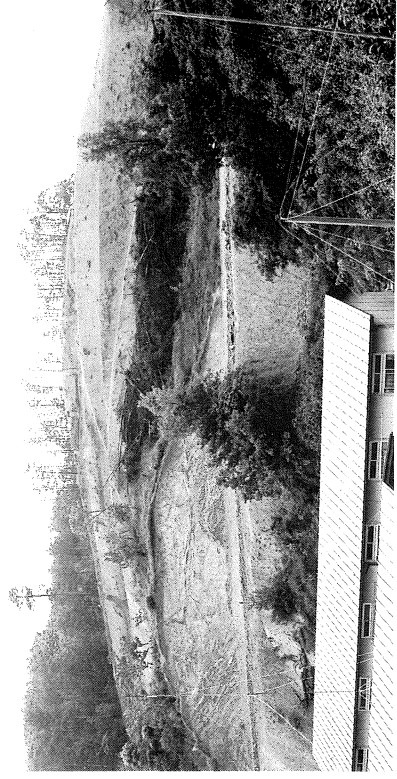
面影山古墳群・図版



2. 調査地近景 (南東から)



1. 調査地遠景 (南から)



4. 調査地近景 (南から)

3. 調査地より空山遠望 (右手大路山)



2. 調査完了後全景 (西南西から)



4. 面影山74号墳第1主体



1. トレン子掘り下げ後全景 (西から)



3. 面影山74号墳全景 (南東から)



1、面影山74号墳第1主体遺物出土状態（東から）



2. 面影山74号墳第1主体遺物出土状態近景



3. 面影山75号墳全景（南から）



4. 面影山75号墳主体部（西から）



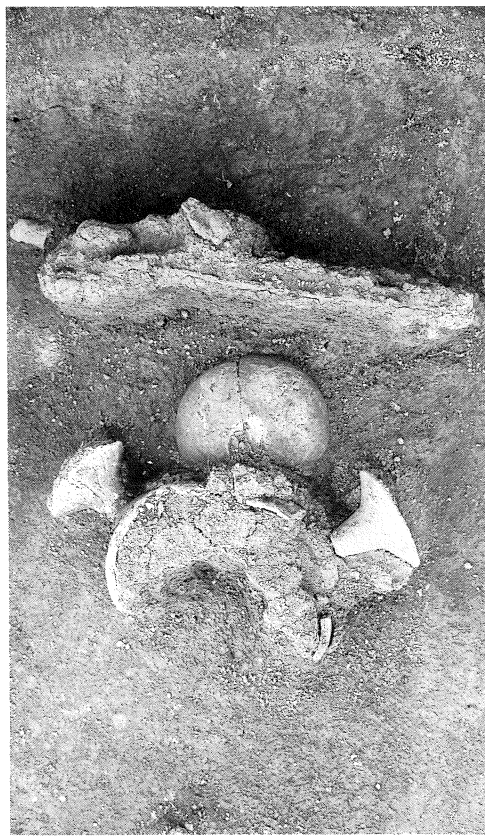
1. 面影山76号墳全景（東から）



2. 面影山76号墳固構内土器出土状態近景



3. 面影山76号墳主体部（北東から）



4. 面影山76号墳主体部遺物出土状態近景



2. 面影山77号墳第1・2主体部 (北から、手前第1主体)



1. 面影山77号墳全景 (西から)

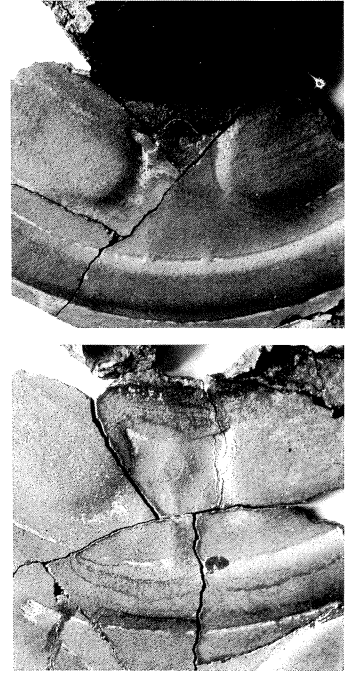


4. 面影山78号墳全景 (西から)



3. 面影山77号墳第3主体

图版 6



9-1



9-2



9-3



9-4



9-5



9-6



9-7



9-8



9-9



9-10



9-11



9-12



9-13



9-14



9-15



9-16



9-17



9-18



9-19



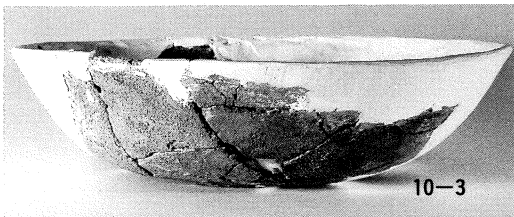
9-20



9-21



10-2

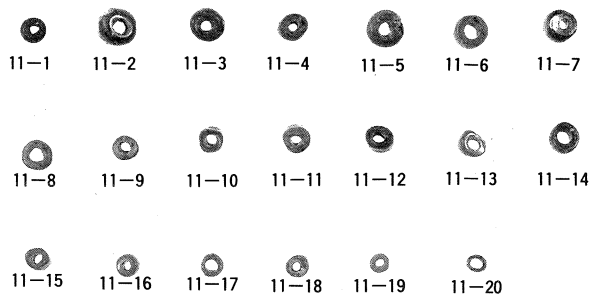


10-3

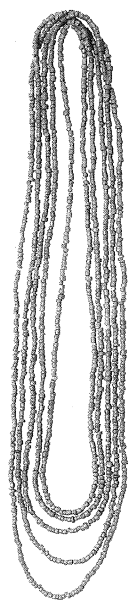


10-1

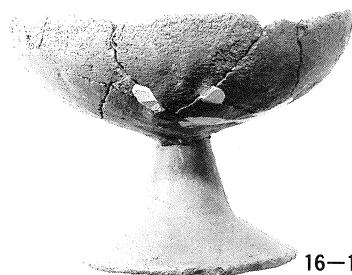
面影山74号墳出土遺物



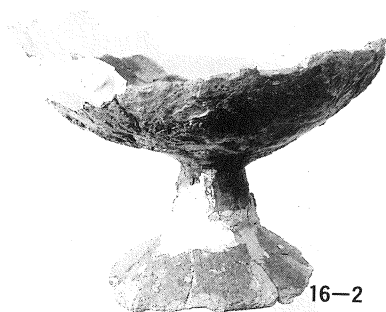
面影山75号墳出土小玉



16-4



16-1



16-2



16-3



16-5



16-6

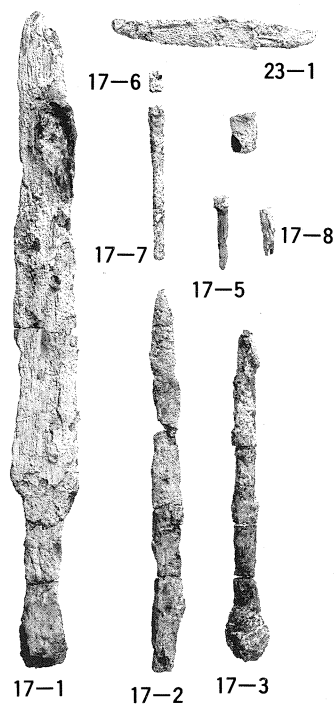
图版 8



22-2



22-1



17-1

17-2

17-3

17-6

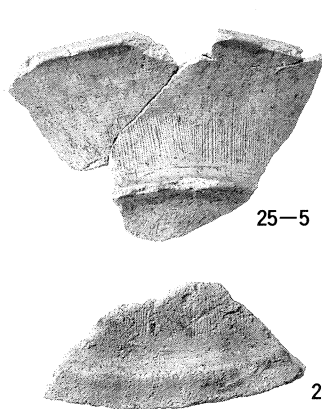
17-7

17-5

23-1

17-8

面影山76号墳出土鉄製品



25-5

25-15



25-8



25-13

面影山78号墳周溝内出土埴輪片

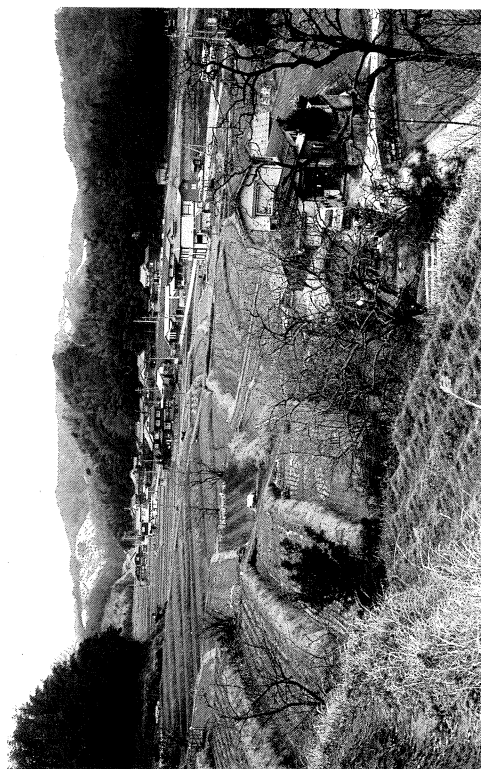


面影山77号墳第3主体
石棺材切削加工痕

面影山77・78号墳出土遺物



1. 調査地北東の向山から



2. 調査地北東端の南東側丘陵から



3. 調査地南西端から



4. 調査地中央から北東方向を望む



2. 瓦出土地点近景 (北から)



4. 瓦出土地点近景 (東から)



1. 瓦出土地点遠景 (南東から、左手新町集落)



3. 瓦出土地点付近出土の礫石 (?)

吉岡遺跡・図版





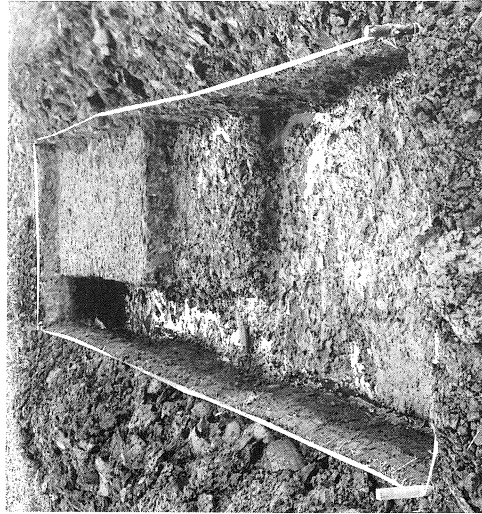
2. 第3トレンチ (南西から)



4. 第5トレンチ (南から)



1. 第2トレンチ (南から)



3. 第4トレンチ (西から)



1. 第6トレンチ (南東から)



2. 第6トレンチ柱穴 (西から)



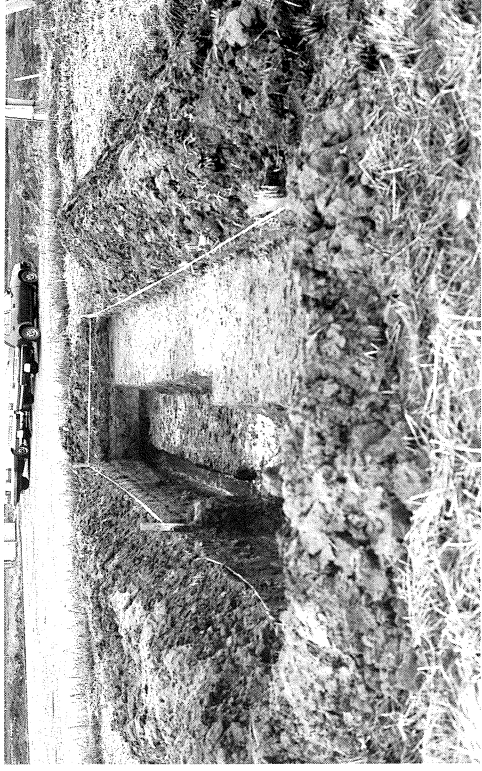
3. 第6トレンチ柱穴 (南から)



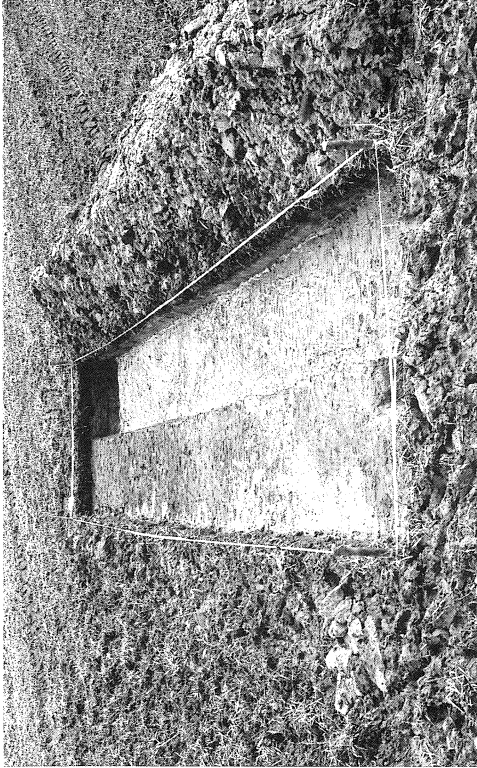
4. 第7トレンチ (北西から)



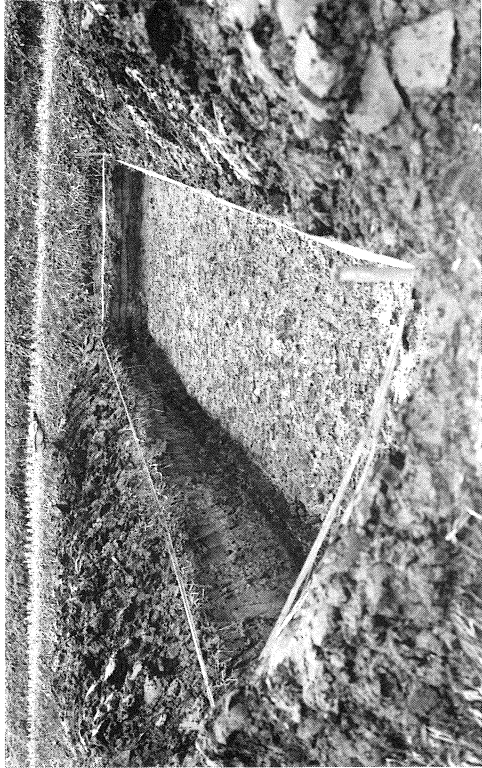
2. 第9トレンチ (北から)



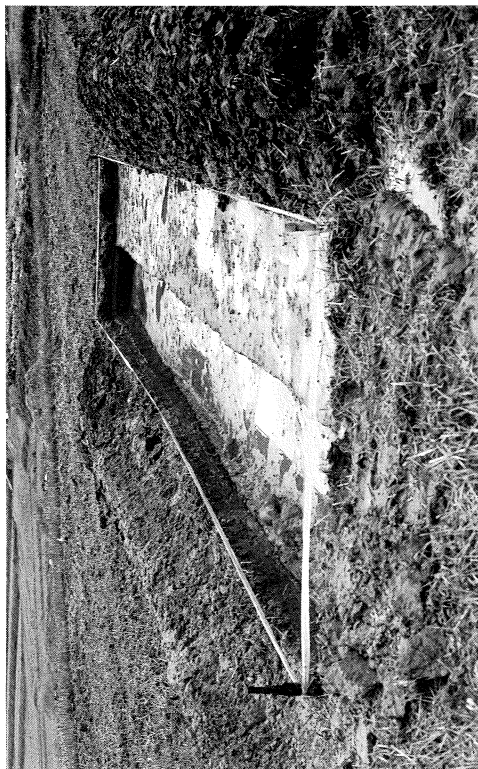
4. 第11トレンチ (南から)



1. 第8トレンチ (西から)



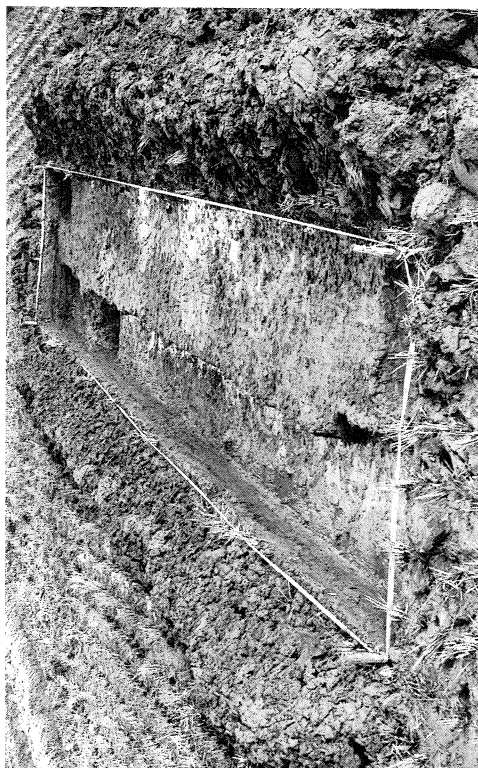
3. 第10トレンチ (西から)



2. 第13トレンチ (西から)



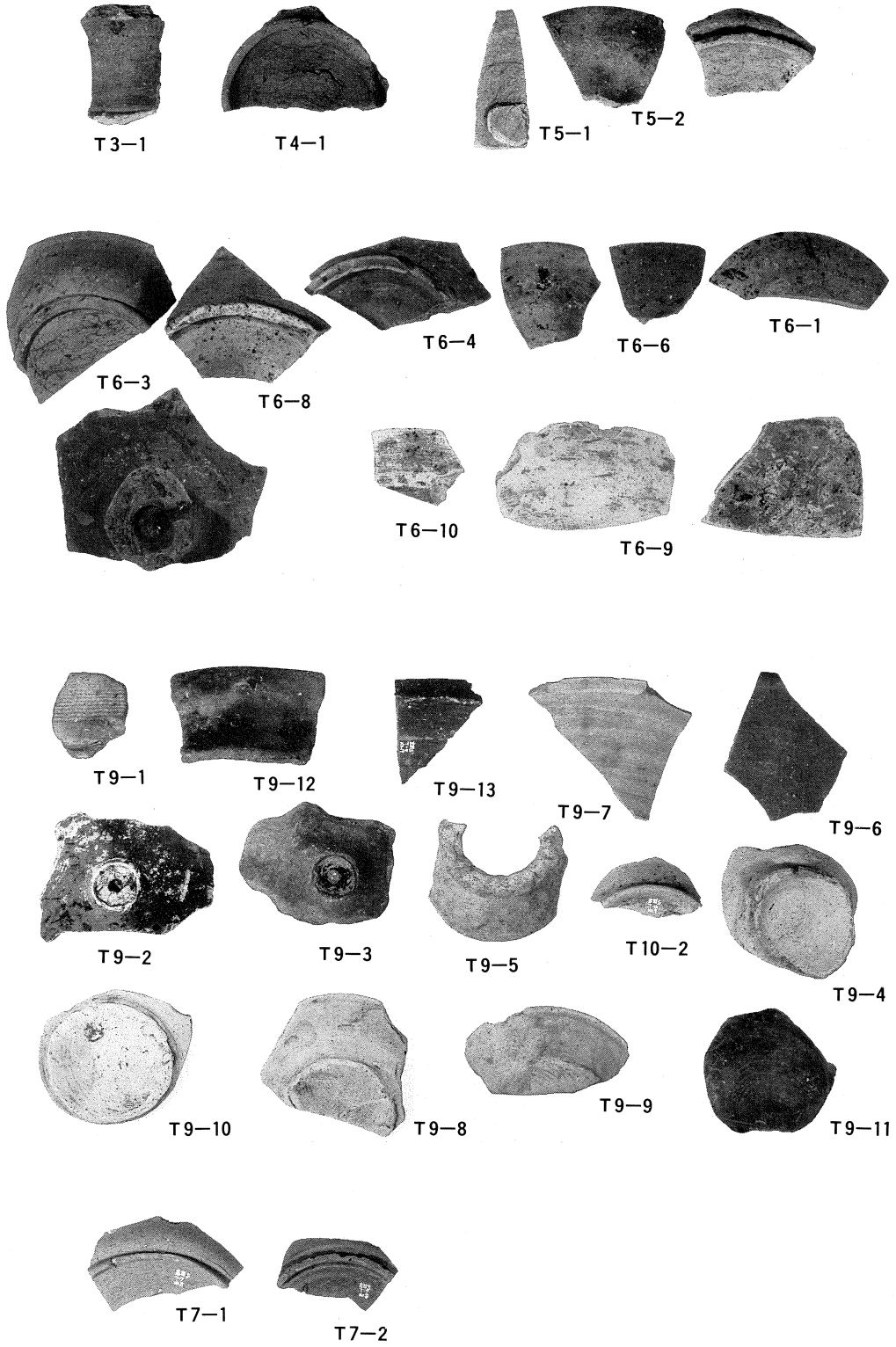
4. 第15トレンチ (西から)



1. 第12トレンチ (西から)

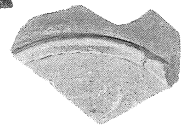
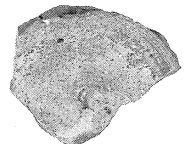
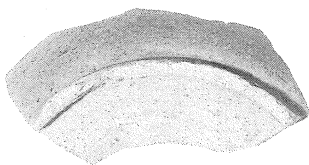
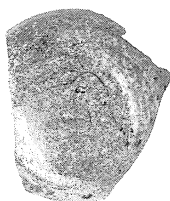
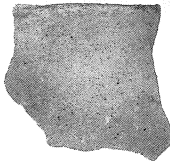
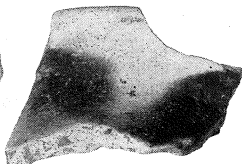
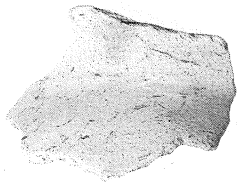
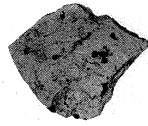


3. 第14トレンチ (北西から)

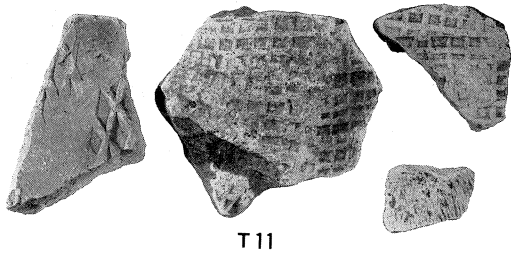


トレンチ出土土器 (T 3・4・5・6・7・9)

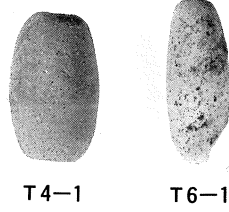
図版 16



トレンチ出土土器 (T10・11・14)



T11



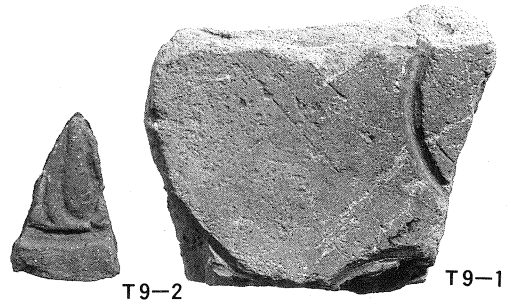
T4-1

T6-1



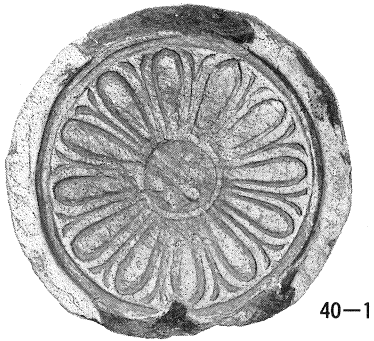
T10

T6

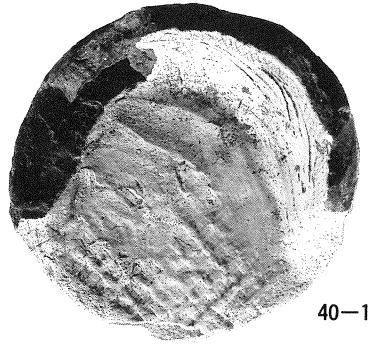


T9-2

T9-1



40-1



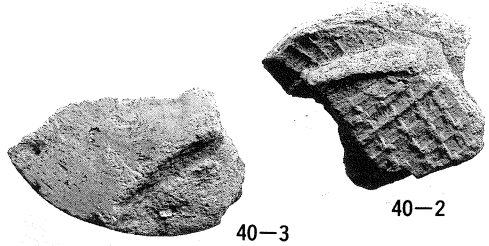
40-1



40-3



40-2



40-3

40-2

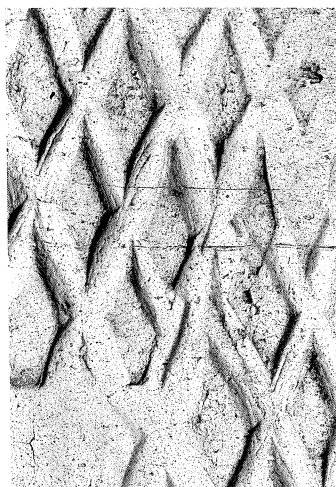


40-4

複弁蓮華文軒丸瓦



正格子目タタキ



斜格子目タタキ



縄目タタキ



布目



42-5

字大海出土瓦、須恵器

鳥取市文化財報告書 22

面影山古墳・吉岡遺跡
発掘調査概要報告書

昭和62年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会
印刷所 株式会社矢谷印刷所
